city&life

都市のしくみとくらし

no.116

Mar-Jun 2016

特集 ロスト近代と都市の未来

city&life no.116 Mar-Jun 2016

巻頭言

都市の未来を考察する 3編のダイアローグ

社会経済学者の橋本努氏は、終戦から1960年代までを「近代」、1970年代から1990年代半ばまでを「ポスト近代」、それ以降現在までを「ロスト近代」と大きく三つに区分する。そして「ロスト近代」という新たな時代では、「潜在能力」が社会を動かす中心的な駆動要因になると予測する。では「潜在能力」とは何か。橋本氏は、自然の本来的価値に基づく多産性の原理であり、さらに、潜在能力が発現する場こそが都市であるとしている。ただしその都市は、都市内部に完結するものではなく、周囲の自然環境をも取り込んだ生態的な都市であり、植物界を範とするバイオミミクリー（生命＋模倣）的な都市だという。

一方、都市史・都市建築史の分野では、昨今「テリトーリオ」に関心が集まっている。「テリトーリオ」とは、英語のテリトリーのことで、日本語では領域、地域と訳される。しかし、その射程ははるかに広く深い。都市のみならず、その後背地に広がる田園・農村などの地理的空間、さらに政治、経済、社会の圏域をも含む包括的概念である。

今号では、ロスト近代の都市における「潜在能力」にフォーカスし、その具現化をテリトーリオの思想に見出し、バイオミミクリー的都市、あるいは来るべき時代の都市・農村の融合、都市・郊外の有機的連関について考察する。（編集部）

表紙・裏表紙―鈴木知之《parallelismo》カヴール大通り（南側）／バルレッタ［部分］

特集　ロスト近代と都市の未来

contents

対談―❶ 生態的都市 可能性としてのテリトーリオ | 進士五十八×陣内秀信　2

対談―❷ 過疎を逆手に あえて都市に野生を放つ | 林直樹×姥浦道生　12

対談―❸ 都市の潜在能力 ロスト近代・ヘテロトピア・自然の多産性 | 内田隆三×橋本努　20

グラビア | parallelismo | 鈴木知之　10,18,23,28

連載 スキマファイル⑦ | 水都大阪、スキマクルージング 水の回廊を巡る　29

連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑦　34
代沢みこころ保育園「荒れた裏庭を、子どもたちの力で楽しい園庭に」
ABCみかげ保育園「くぐってのぼって、無限の空間で膨らむ想像力」

back number・information　38

対談—❶

生態的都市

可能性としてのテリトーリオ

最近、都市計画や都市史のなかで、イタリア語の「テリトーリオ」という言葉が注目されている。英語では「テリトリー」、日本語では「領域」と訳される言葉だが、使われている意図には、もっと具体性がある。都市の後背地に広がる田園・農村、その歴史や文化、生活、さらに、都市をも含むものとして「テリトーリオ」という言葉が使われているという。では、この言葉が具体的に表わす都市像とはどういうものなのか。農学、造園学の立場から、かねてよりエコロジカルな都市像を提案し続けてきた進士五十八氏と、テリトーリオを日本に紹介する第一人者でもある陣内秀信氏に語り合っていただく。会場は世田谷区・下北沢にある「本屋B&B」。聴衆を前にしての公開対談として収録した。

Photo:**坂本政十賜**

進士五十八
東京農業大学名誉教授

×

陣内秀信
法政大学教授／弊誌企画委員

「テリトーリオ」と「ルーラル・ランドスケープ」

進士——本日の対談のテーマにある「テリトーリオ」とは、英語の「テリトリー」という意味でいいんですか？ 僕はテリトリーと聞くと「ゴッドファーザー」を連想します。ヤクザの「しま・縄張り」ですね。蘇我馬子は池と島のある庭園をつくって珍しがられて「島大臣」と呼ばれました。古代、「庭園」は「しま」と呼ばれ、囲まれた空間の範囲、つまり自らの縄張り範囲、マイスペースだったわけです。「ガーデン(garden)」だって、守られているという意味の「ガン(gan)」と、悦び・愉しみの意味の「エデン(eden)」の合成語で「安全で快適なスペース、エリア、プレース」。それで私は「理想境」の意味だと話しています。

陣内——なるほど、進士さんらしい連想ですね。「テリトーリオ」は、シンプルにいえば都市の後背地に広がっている農村、田園地域のことです。ただ、イタリアで1980年代後半から積極的に使われ始めた意味には、それより少し具体性がある。都市とその後背地にある田園、そこでの暮らし、営み、建築資産、文化などを総合的に見て、再評価しようという意図で使われている言葉です。

僕が建築を学んでいた1970年代前後、日本は高度経済成長の最中で都市はどんどん拡大し、改造され、町の歴史も、自然も失われたコンクリートジャングルへの道を突っ走っていた。一方で郊外の田園もスプロール化で侵食されていく。僕は学生なりに、こんなことでいいのだろうかという疑問を感じていました。それで世界に目を向けると、イタリアでは当時、歴史的な都市を再評価し、それをまちづくりや都市計画に活かして非常にうまくいっているという。そこで僕はイタリアへ渡り、ヴェネツィアに2年、ローマに1年留学したんです。するとイタリアと日本の課題は非常に良く似ていることがわかった。イタリアでも高度経済成長に伴い、農村から都市へ、みんな工場労働者として出て行ってしまったため農村や山間部が疲弊していた。過疎と過密がめちゃくちゃに進行したのです。ですが、それがだんだん落ち着いてくると、人々は本当の豊かさとは何かを考え始めます。そこで、まずは歴史的な都市をしっかりと価値付けして、破壊的な開発ではなく、古いものを活かしながら、リノベーション型の都市を再構築していった。そのピークが1975年です。そして、「テリトーリオ」ということがいわれ始めるのは、その次の段階なんです。

都市の再生がうまく進み、成熟してくると、今度は徐々に周辺に目が向けられ始めます。たとえばトスカーナの起伏に富んだ丘陵地に糸杉の並木があり、小高い丘の上には小さな農家が建っているという、なんでもない田舎の風景が、急に一幅の絵に見えてくるわけです。それまで近代化を突っ走って、合理主義的に生産性ばかり考えていた時にはわからなかった価値が見えてきた。農業景観は文化的な景観である、と。当たり前なことではあるのですが、それが1980年代に入ると急速に表に出てくるんです。ただ、そうはいっても、農業が疲弊していてはどうしようもないので、景観法によってそれらの風景を守るのと同時に、1985年にはアグリツーリズム法が制定されて、政策としても農業ゾーンの再生を打ち出していく。「スローフード運動」が始まるのが1986年ですが、これも同様の流れです。

するとフランスやイギリスからも、トスカーナのような田園にセカンドハウスをもちたいという人が流入してきて、1990年代にはIターン、Uターンする若者も増えてきます。注目する人が増えるにしたがって、建築のリノベーションなども上手に行われるようになって、美しい景観、豊かな環境、地産地消などもそうですが、そういう、テリトーリオに眠っていた資産、価値がどんどん引き出されるようになっていった。そういうなかで、テリトーリオという言葉が、非常に意欲的に使われるようになっていきました。2000年代にはもう当たり前の言葉になって、誰でも使うようになっています。ですから、英語の「テリトリー」というと何を示すかが茫漠とするのですが、「テリトーリオ」の場合は、都市の周辺に広がっている、本来豊かな農村景観。人間がつくり出した秩序ある自然環境をもつ地域を意味するのです。

日本もだんだんとそういう方向に向かっているのかな、と思うんですが、なかなか専門家も行政も、都市と農村を総合的な枠組で見るような、新しい方向付けができません。ただ、進士さんから見れば「何を今さら」という感じでしょう。

進士——そんな言い方はしていません(笑)。ただつくづく、工学部と農学部では立脚点が違うなぁとは常に感じてきました。たとえば人間居住の本来形は、文明史的には、また建築家の皆さんは「究極は都市」が常識でしょう。しかし僕のように農学・造園学、人間といえども基本は生物だという視点に立てば、必ずしも都市でなければならないとは思わない。生産生活、社会条件などによって、多段階の人口密度の都市も農村も許容されるはずだと考えています。もっといえば、地球環境問題は人工化・都市化に由来するエネルギー大量消費型文明のせいですから、僕はこれまで「20世紀は農村の都市化の時代であったが、21世紀は都市の農村化を進めなければいけない時代」だと主張してきました。ヒートアイランド現象、脱温暖化や生物多様性への要請に応えるランドスケープの立場からいえば本気でそう考えてきた。それが、陣内さんは法政大学にエコ地域デザイン研究所を創設されたうえ、今度は都市の背後にある農村地域も含めて「テリトーリオ」の計画論をめざされるというのですから、大歓迎ですよ。

造園界でも最近の大規模都市再開発は超高層ビルの外構でしかない、大地までもすっかり人工的に加工してしまう「アメリカン・ランドスケープ」が主流のようですしね。アーバンデザイン、景観デザインなどエリア全体で構想する流れは歓迎ですが、外部空間までも直線的構成と、鉄、アルミ、コンクリ

進士五十八
しんじ・いそや―1944年京都生まれ。東京農業大学造園学科卒業、農学博士。造園家、日本学術会議会員、東京農業大学名誉教授・元学長、2016年より、福井県立大学学長。2007年には紫綬褒章を受章。著書に『日比谷公園　100年の矜持に学ぶ』（鹿島出版会、2011）、『グリーン・エコライフ』（小学館、2010）、『日本の庭園　造景の技とこころ』（中公新書、2005）など多数。

ート材料で、まるで建築デザインの延長のようなランドスケープデザインには違和感があります。市街地といえども大地には雨が浸透し、風が吹いたら落ち葉が舞い、それらはやがて土に還るべき環境の余白が不可欠です。市民が日常生活のなかで地域に参加し自分の町を体験でき、さらに地域の違いを感じられるデザインであってほしい。僕の最初の本『緑からの発想』（思考社、1983）のサブタイトルに「郷土設計論」と付けたのはアーバンデザインへのオルタナティブのつもりでした。でもデザイン手法のあり方を提案しても現実は変わらないので技術書を出して理解を求めようと、次に『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法 農に学ぶ都市環境づくり』（学芸出版社、1994）を出しました。

陣内――「アーバン」に対する「ルーラル」、すごくいい言葉です。以前から、ルーラル・ランドスケープという視点は非常に重要だと思っていたのですが、これ、ヨーロッパではけっこうやってきたわけです。テリトーリオという概念もこの延長線上にあります。

また進士さんは「村並み」という言葉もつくられましたね。これは愛媛県の内子町、その役場職員で40年にわたって町並み保存に尽力された岡田文淑さんが進士さんを引っ張り込んで、今度は市街地から周辺地域に目を向けて農村集落の活気をつくろう、と。その時に提唱されたのが「村並み」。今から20年くらい前ですね。農村集落が元気だからこそ、市街地も存続できる。これはまさにテリトーリオと同じ考え方です。こういった「村並み」や「ルーラル・ランドスケープ」という言葉が、その行為に意味を与えるし、次の目指す方向を見せてくれると思うんです。

それにしても、その後、進士路線を継いで発展させていく仲間が意外と出ていないんじゃないですか？ パイオニアが孤立無援状態。もっと専門家が触発されて、「論」として、あるいはケーススタディとして、発展させていくべきだったと思うんですけど。

進士――これが困ったものなんです。あまり言いたくないのですが、現代農学も、現代造園学も、工学化・工業化してしまったんですね。ルーラル・ランドスケープの本場である農村も、工業化・都市化を余儀なくし、また歓迎しているからです。本来農村は、谷津田などの微地形が生き、農道はスラローム曲線を描き、棚田はコンタースケーピングで成り立っている。鎮守の森、屋敷林、農業用水、そのすべてが自然環境の循環・共生を体しています。農村風景は、農民の生産と生活を調和させ持続可能にする長年の知恵や経験の結果そのもの。完璧な「マンメイド・ランドスケープ」なんですね。

それが、農地造成は農業工学、農業経営は農業経済学というように縦割りになって「農」全体を認識せずに、一般土木学、一般経済学の知識を農業農村に適用してしまうようになった。農道も区画整理のように直角格子、あぜ道さえコンクリート。農業用水は管理が大変だからとパイピングしてバルブで水量をコントロールするから生き物は棲めなくなった。農業経済学者が農産物のブランド化を進めたため連作障害がおこるようになり農薬散布が過度に行われる。農村地域のインフラ整備手法も都市と同様工業製品で覆われ、農村から多孔質空間は消失する。たとえば石を積むでしょう。昔の石積みなら石と石の間に隙間があって、そこに蛇やイタチが棲めた。庇の大きな農家なら、そこにツバメの巣もできた。あらゆる生命と共存できるデザインだった。それが今や田舎でもプレハブ住宅ですからね。日本中似たもので埋められ、どこにもふるさとを感じない。農村では土地に生える樹種や作物によって「地域らしい風景」が見られたものですが、スーパーマーケット、プレハブ住宅、アーバンデザインにより無機的で画一的になり地域の魅力も大幅減。もっと有機的なデザインが必要だと「ルーラル・ランドスケープ・デザイン」を提案したのです。

本来なら、わざわざ「ルーラル」なんて言わなくても、「ランドスケープ」とはそういうものです。「ランド」は「土地・自然」を意味し、「スケープ」は端から端までの意味で「全体・総合」だと私は説明してきました。僕の考えでは環境デザインへのアプローチは、建築的「アーバンデザイン」、土木的「シビックデザイン」、造園的「ランドスケープデザイン」といろいろあってよく、それぞれにふさわしい活用をめざせばいい。ただ僕としては、日本の風土を見つめながら地方創生をめざしてほしいし、観光立国もその延長で考えたい。

陣内――本来、一つひとつの場所をつくっていく技術には、経験や知恵がたくさん詰まっていて、それがとても理にかなったシステムにもなっていたわけですよね。

都市と農村の「隙間」

陣内――僕らはエコ地域デザイン研究所として、長らく東京の多摩地域にある日野市と付き合っているんですが、僕自身が、なぜ日野に興味をもったかというと、僕が子どもの頃に育った環境がまだ残っていたからです。僕は東京郊外、杉並区の阿佐ヶ谷で育ちました。高度経済成長期に入るまでは田んぼがけっこうあり、その上には武蔵野の森があって、斜面地には神社があるという環境でした。また、小学校の近くには縄文遺跡がありましたが、そういう場所には、中世に神社ができ、お寺ができて、学校ができたという、歴史的な文脈が残っていました。理にかなった土地利用があって、それが風景をつくっていたんですね。それがだんだんと近代化に伴い壊されていくと、何がなんだかわからなくなってしまう。住んでいる人も交通利便性がいいから暮らしているというだけで、町の特徴や歴史、風景に対する関心がまったくなくなって、便利であればどうでもいいや、という感じになっていく。日本の郊外はみんなそうなってしまった。

それが日野に出会った時に、そういう、土地の歴史、原風景の部分がまだちゃんと刻まれていたんです。それはどんどん崩されてはいますが、まだ、しっかり観察すればわかる。だから僕らは今のうちに調査して、地域にあるものをうまく価値付けし、それを生かすような方向で町の発展の方向をリードできないかと思ってやっているんです。それができれば、緑はもっと集積するし、川は豊かに流れる。しかし今、そういうストーリーを描く、シナリオをつくる根拠がないんですね。

進士――まったくおっしゃる通り。NHK科学産業部のディレクターだった加藤辿さんは『都市が滅ぼした川 多摩川の自然史』（中公新書、1973）を書いていますが、加藤さんと僕は河川史の高橋裕先生のチームに入って1970年代の日野市全域の元農業用水の水路ネットワークを調査しています。その網の目のデータから僕は考えました。日野の田圃は用水ネットで稲作が可能であった。人間の健康は、身体の隅々まで血管と神経がゆきわたっていて守られている。これと同様に、健康な都市は町中に緑と水がゆきわたっていなければいけない。それが僕のオープンスペース計画論の基本です。

近代都市計画って、結局、土木的にインフラ整備することですよね。その時コンクリート強靭化だけでよいか。最近、グリーンインフラと言い始めていますが、自然生態系、農業生態系、もちろん健全な都市生態系も本気で構想すべきです。人間も生き物。その生き物が住める環境とは何か。わかりや

すくいえば遊びがある、自由がある、隙間がいっぱいある環境です。全部をモノで埋めてしまうのではなく、オープンな大地、オープンな水面、オープンな緑地があって、人も生き物も、生き方までもが呼吸困難にならないようでないといけません。

陣内――昔は都市のなかにも隙間がありました。千葉大学の木下勇さんが、1982年に「三世代遊び場マップ」というのをつくったんですね。2007年に平成版を新たにつくったので今は「四世代遊び場マップ」になっていますが、これは世田谷区の太子堂で世代ごとの遊び場を聞き取り調査し、それをマッピングしたものです。近代化のプロセスと子どもの遊び場の相関関係を調べた非常に重要な研究成果ですが、これを見ると、昭和初期版、昭和30年度版などはとくに、都市も隙間だらけだったことがわかります。家ごとの垣根も厳密に敷地を区切ってはいないし、庭にだって入れちゃう。空き地もたくさんあって、路地もある。そんな都市の隙間が子どもたちの遊び場になっていた。ですが平成版になると空地や路地そのものがなくなって、子どもたちは、家の中か、遊び場として定められた学校の校庭や公園へ、わざわざ遊びに行かなければならなくなっている。隙間が全然ありません。

進士――今おっしゃった木下さんの研究は非常に面白くて、僕も感心しました。それで、「三世代」の時に議論になったのは「原っぱ公園」という言葉です。「原っぱ」でいいじゃないか、と。ですが「公園」にしないと、オープンスペースは成り立たないのです。「現状の原っぱ」はあくまで開発予備地ですから、数年後には必ず開発される。それを、都市計画上「公園」に指定しておけば「原っぱのデザイン」が可能になる。つまり、従来の都市計画論にはテリトーリオの視点は入っていないということですね。イギリスの計画法は「Town and Country Planning」といって、都市農村計画。僕はこれを当たり前だと思いますが、日本の都市計画はそうなっていません。しかし、もともと日本の土地利用は都市と農村がモザイク状に連担していた。タウンとカントリーは完全共存です。そもそも近世までタウンなんてたいしてありませんでした。江戸市中でも大名屋敷とお寺が所々にある程度でその周りは農地だらけ。だから新鮮な農作物が供給できたし、雨も十分浸み込んで、武蔵野三大湧水と呼ばれる三宝寺池、井の頭池、善福寺池ができたという風致抜群の土地だった。

水辺から都市をとらえ直す

陣内――東京の湧水文化って、すごいですよね。今は、井の頭池も善福寺池もポンプアップしないと水が足りない状況にはなっていますけれど、湧水がこれだけ価値をもっていて、現代でも多くの人がそれをリスペクトしている国って、なかなかありません。ヨーロッパでは古代ローマ時代にはそういうセンスがあった。以前、ヴェネツィアの後背地を流れるピアーヴェ川を遡って調査したことがありますが、古代ローマ以前の人々はその水源をサンクチュアリと考えていて、いろいろな奉納物を投げ込んでいた。ですがキリスト教の時代になるとそういう自然崇拝は廃れ、自然は人間がコントロールするものだという考え方になっていく。

ところが日本では、これだけ現代文明が進んでいながら、やはり水に神聖性を感じていて、神を祀ったりし続けている。そういう意味では、水が大地を潤し、食物を育てて生物を生かし、人間の集落ができて、文化も育んでいるという大きな流れを、みんなが共通認識として理解している。それはテリトーリオを考えるうえで非常に大切な視点です。

進士――日本ほど全国どこへ行っても清水が豊かな国はないでしょうね。ただ、それを当たり前にしすぎているせいで危うくしているのが心配です。そのままで飲めるような水が流れている河川のある美しい国に感謝すべきだし、そのもとは豊かな山林であること、生産の場として生きている広大な田畑が広がっているおかげだということも忘れてはいけません。

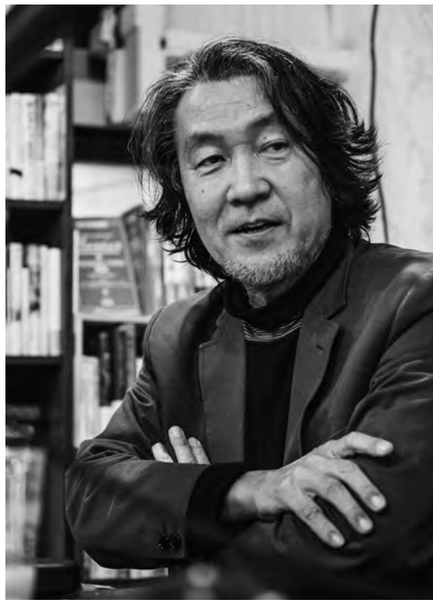
陣内――水辺環境に関していうと、じつは今、ヴェネツィアではアドリア海の干潟、ラグーナの総合的な見直しが進んでいるんです。「ヴェネツィアはラグーナである」という言葉をキャッチフレーズに、交易の要衝として、また食料の供給地として、さらに遊興の地、文化を育んだ場所というように非常に多面的な場所であるということを再評価し始めています。

ラグーナっていうのは東京湾に非常によく似ているんです。干潟が多い浅い海で、そこに航路が澪筋のように確保されていて、魚の宝庫でもある。ラグーナの場合はそこに島がいっぱい浮かんでいるので、そこで野菜や果物、ブドウを育ててワインをつくったりもしているんですが、塩田もあって。狩りもやるんです。東京でも、江戸時代には浜離宮は狩場だったんですよね。つまり、食料を供給する基地でもある。

かつてヴェネツィアの人はこのラグーナと都市が一体であることを当たり前にしていた。つまりテリトーリオとしてとらえていたわけですが、それが近代化によって工業開発が進んで、地下水のくみ上げで地盤沈下が起きたり、タンカーを入れるために運河を掘ってしまって水の循環を壊してしまったり。大気汚染、水質汚染も進んでヴェネツィアの環境が全体的におかしくなってしまった。それを今「ヴェネツィアはラグーナである」と言い始めている。だから、東京湾もそういう風にならないかな、と思っているんですけどね。

進士――浜離宮、江戸期の将軍家の浜御殿ですが、この浜の苑を例に「大名庭園多面的機能・多面的意義」をお話ししておきたいのです。浜御殿はもともと甲府藩の下屋敷として埋め立てられます。これをつくった松平重宣の子、綱豊が六代将軍・家宣になったので将軍家のお庭になったわけです。浜の苑には鴨場が二つあります。鴨場はレクリエーションの場ですが、当時は、弓場、馬場と同様、武家の武芸、トレーニングの場所でした。どうもみなさんは「庭園」というと、もっぱら慰楽遊興の場だと思っているようですが、僕の研究では非常に多面的機能を果たすべく営まれてきた空間です。将軍や大奥、大名旗本の園地利用はもとより、公家の接待など渉外の場、普通は薬草園ですが青木昆陽のサツマイモ栽培実験など殖産振興の場としても活用された。幕末には砲台など江戸湾の防衛拠点などです。とくにいざという時、将軍は江戸城から日比谷濠、山下濠を経て築地川を下り、浜のお舟入を上がって休憩し、やがて船で外洋に逃げることもできた。江戸城の出城でもあるので、浜には大手門枡形もあるのです。それから、周りは海ですが普段は禁漁区にしておき、将軍の御成の際、御座船に大奥の女性たちを乗せて来た時に解禁する。漁師たちは必死だから見物は大いに盛り上がります。労働と遊びの両方が庭園には重なっているわけです。

何が言いたいかというと、生存の条件を充たすのが「庭園」だという「庭園の社会性」についてです。テリトーリオという農村地域を内包する環境文化的な課題は、シティセンターが生きるために不可欠なバックヤードとして、水や食料の供給、さまざまな資材、労働力の供給場所の問題だった。もちろん自然生態的にも生態系サービス提供上も必要な自然的環境地域であったのです。浜の苑は10万坪ですが、全国



陣内秀信
じんない・ひでのぶ―1947年福岡生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了・工学博士。法政大学デザイン工学部教授。イタリア、パラレモ大学、トレント大学、ローマ大学にて契約教授。著書に、『世界の水辺都市を巡る《ヨーロッパ・アジア、そして日本》』（弦書房、2016）、『イタリア都市の空間人類学』（弦書房、2015）など、編著書に『水都学Ⅰ-Ⅴ』（法政大学出版局、2013-2016）など多数。

に残る大名庭園もそれぞれ何万坪もあってそこにはそういう土地利用の思想が凝縮されている。農業農村の縮図でもあります。

今日本は食料自給率が40％未満、世界中から食材をかき集めて日本人は生きている。それは異常です。ヴェネツィアでラグーナを見直しているというお話ですが、日本も水辺環境のみならず都市と農と食の環境について、美意識の視点をもちながら考え直さなければならいのは自明でしょう。

生態的な環境としての都市空間

陣内――浜離宮は隅田川の河口ですけど、進士さんは隅田川沿いの、深川育ちですよね?

進士――ええ。京都で生まれ、福井に小学校の半ばまでいて、その後結婚するまで深川の木場で育ちました。

陣内――最近、幸田文さんの『ふるさと隅田川』(金井景子編、ちくま文庫、2001)を読んだのですが、すごく面白い。彼女は1990年に亡くなりましたが、向島に生まれて、以降引っ越したりするんですが、基本的には隅田川の周りに住んでいた。ですから、高度経済成長期の頃なんかは水質が悪化して臭くてたまらないし、台風の時にも浸水被害にあって大変だった、と。時には溺死者なんかも流れてくるから、嫌で、嫌でしょうがないんです。だけど、惹かれるっていうんですよ。

つまり、先ほどから進士さんが強調しておられるように、水は生命の基本であり、自然も人間も育てるんだけど、生活文化も育んできた。そのなかで隅田川は、とくに多様な側面をもっていると思います。

進士――僕も子どもの頃、床下浸水は体験しました。ジェーン台風(1950年)かな。僕が住んでいた深川は江戸以来の寺町なので、遊び場の風景はお寺と墓。あとは南洋材丸太の筏が浮かぶ木場の堀割でした。

陣内――水を中心とした風景に、寺があり、墓があり、いろんな要素がありますよね。そういうのって、東京のすごい財産だと思います。ですが1980年代前半のウォータフロント開発ブームの時、進士さんのいう建築や土木の専門家は、こぞってアメリカやヨーロッパに視察に行って、欧米の真似をしたわけです。僕自身は、それはちょっと違うんじゃないかと思い、抵抗の論理で研究のフィールドをアジアにしたのですが。

そもそも隅田川沿いって、古代、中世の文化・文明によって成立しているものが多いんですよね。江戸時代よりも前から人間の暮らしと密接にかかわってきた。そうなると、相当根源的な、水と社会のつながりがあるんです。これはすごい財産。ですから、機能主義、合理主義だけで技術論的にカッコいい空間をつくっておしまいにしては本当にもったいない。

進士――隅田川の川向こうは、昔は上総の国、江戸の膨張でまもなく江戸町奉行の管轄内に入って、木場、寺町、職人町などもでき門前仲町、辰己芸者となる。北は亀戸大根、東は砂村ネギが名産というように農村が広がっている、いわば江戸のテリトーリオだった。向島には将軍家の御薬園と御殿もあったし、日本橋などで大きく商っていた町人たちの寮や隠居所、休みの日に遠出する田園行楽地でもあった。亀戸に加えて新梅屋敷といわれた向島百花園など民営園地も経営され、正月には向島七福神や深川七福神が行楽コースで賑わうようになる。下町一帯の寺院では行楽客のお賽銭目当てに、人々を集めるための仕掛けとして「六地蔵(不動、観音)」とか桜、紅葉、萩、アジサイ、つつじなどを植えた名所「花の寺」となっていく。そうした一帯は、都心と共生しつつ、都市を持続させるための多面的機能を果たす農的地域。それは陣内さんの言うテリトーリオで、江戸では川向うに深川、本所、向島、葛西と今の江戸川区へと続いていたのです。こういう感覚が、今の都市開発にはなさすぎる。ビルの外構しか構想しないランドスケープデザイナーでは困るのです。エコ地域デザイン研究所の出番ですよ。

それからもう一つ、言っておかなければいけないのは、江戸東京の下町型産業構造です。町人も職人も、身一つで零細資本。大規模工場だの集団だのとは無縁ですから、モノづくりはすべて分業制で、地域内のたくさんの下請けさんに各工程を回して一つを完成させる方法です。京都の西陣織などもそうですが、地域内の人的ネットワークのなかで一つのものをつくりあげていくんです。だからこそ農村同様の生産・生活一体型コミュニティも形成されるし、業種で町の個性もつくられてきたのです。テリトーリオという考え方は、人間が本来的にトータルに生きるため、人と自然との共生環境を実現しようという僕の造園学とぴったりですよ。生き方、暮らしかた、生業は、全部つながっているわけですからね。

陣内――おっしゃる通りです。産業、行楽、宗教、いろんな要素があるなかにいろんな人間がいて、多様な領域をつくっていた。それが、鉄道が通って、道路がつながって、利便性がいいからということだけで人がたくさん暮らすようになるから高層マンションが林立する。もともと大名屋敷だったところは近代になって工場になって、それが廃れると今度は大型ショッピングセンターになって。みんなワンパターンですよね。下町が本来もっていた複合的性格、文化を生む力、生業はみんななくなって、均質空間になってしまうのです。それでいいのか、本気で考える必要があります。

進士――今日のテーマは、テリトーリオは「生態的都市」であるべし。さらにその可能性を探るっていうことでしょう。でも多くの方はそれを理念、理想でしかないと考えてしまう。しかし狭い世界でそのことを見せているのが、さきほど浜の苑を説明しましたが「江戸の大名庭園」だと思うのです。庭園には、水も動植物も、生産も労働も、武家独自の生活機能も享楽も、みんな入っている。多面的機能が有機的に、しかも美的な環境としてつくられた理想都市の縮図です。これからの都市を考える時の原理を学ぶことができるはずです。パリの都市改造がベルサイユ宮苑をモデルにしたことは有名ですが、江戸の戸山荘、板橋の加賀屋敷など「農と美の調和世界」を今一度再評価すべきかと思います。

生物多様性条約のCOP10の折り、僕は環境省の「里地里山保全活動行動計画」の検討会座長としてその政府方針をまとめました。里地・里山は、人の住む家や里のテリトーリオですよね。二次自然です。人間が生きるために身近な自然と上手に付き合い、自然からの恩恵をいただきながら、人間生活の結果、二次自然の持続性を担保してもいる。こういう人間と自然と地域の好ましい関係のベストモデルが日本にはある。それを世界に発信したい。これが「SATOYAMAイニシアチブ」でした。都市の時代にあってもその持続可能性のためには、そこまで意識しないといけないのだと、皆さんに強調しておきたいですね。

陣内――最初に進士さんがおっしゃったように、「テリトーリオ」という言葉がどういう意味であるか、認知をもっと高めて、計画のなかに位置付けていければいいのですが。日本語では「領域」ですが、それだと漠然としてわかりにくいので、何かいい言葉がないでしょうか。里地、里山ということなのかもしれませんが、進士さん、「ルーラル・ランドスケープ」や「村並み」のような、いい言葉を考えて下さいよ。

グラビア

Parallelismo

鈴木知之

Le Mura/Ostuni 城壁／オストゥーニ

対談—❷

過疎を逆手に

あえて都市に野生を放つ

日本の過疎問題は、主に中山間地域の人口減少に伴うものとして1960年代から顕在化してきている。しかし、今や人口減少はそうした中山間地域だけの問題ではない。2014年には、2010年から30年間の女性人口の減少率から消滅可能性をもつ896自治体が発表され、そのなかに、東京23区内の豊島区が入っていたことで話題になったが、このことは、もはや都市部と中山間の農村、あるいは漁村といった区分けを掲げたままで、都市・町・村の存続を考えることの限界を示してもいるのではないだろうか。2010年に編著書として『撤退の農村計画　過疎地域からはじまる戦略的再編』を著した、農村計画の分野で活動する林直樹氏と、都市計画の分野から東北発のコンパクトシティのあり方を検討し、東日本大震災後は復興まちづくりにも実践的に取り組む姥浦道生氏に、都市と農村、それぞれの持続可能性について、語り合っていただく。

Photo:坂本政十賜

林直樹
東京大学大学院農学生命科学研究科特任助教

×

姥浦道生
東北大学大学院工学研究科准教授

過疎の現状と課題

林———まず「過疎集落」とは何かということからお話しさせていただきます。とはいえ、それほど厳密な定義をしているわけではありません。ただ「過疎」と言った時に、5種類くらいのタイプがあると考えています。

一つ目は、個々人の生活から見た過疎です。買い物に行けるか、通院できるかなど、個人の生活面で起きる過疎です。二つ目は、組織としての過疎化。田舎では、何ごとにおいても住民の共同活動で賄うことが多いのですが、それが成り立たなくなっていく。農村計画の分野でも、これまで注目されてきたのは組織としての過疎化です。ただ、現代は行政サービスが高度化していますので、じつは組織が弱体化してもなんとかなるという現実もあります。三つ目は、これは心の問題なんですが、帰属意識の希薄化としての過疎。たとえば、集落を離れて暮らしている人が、生まれ育った集落を故郷としてどれくらい感じることができるか。そういう過疎化もあると思います。四つ目、これはよく言われることですが、財政面からの過疎ですね。相対的に社会インフラが拡散し、維持管理が困難になっていくといった問題があります。そして五つ目は、産業を考えるうえでの過疎。ただ、これは必ずしも悪いことばかりではないようです。たとえば漁業の場合は従事者が減れば分け前も増えるということがあるかな、とは思います。細かく見ていくと、もっとさまざまなタイプがあると思いますが、少なくとも以上、5種類くらいの過疎があります。

一方、過疎集落を数量的に見ると、北海道をのぞく46都府県の山間農業地域に2万2502集落があります。一つの集落が10戸以下になるとさすがに存続が厳しいのではないかということで、仮に、これを一つの基準として見ると、9戸以下のところが、このなかで1771集落(註1)。スケール感としてはそういう感じです。

姥浦——過疎をタイプ別に考えるというのは興味深いですね。林さんの編著書『撤退の農村計画』が出た時、タイトルがなかなか過激で「おおっ!」と思いました。それというのも、ちょうど都市の側でも人口減少が顕在化してきて、いわゆる「コンパクトシティ」というかたちで、町をどうやってまとめていくのかが非常に重要になってきた時期でもあったからです。

山間農業地域の過疎問題は、かれこれ50年前くらいからずっとありましたね。ですが、都市の人口減少が問題視されるようになったのは2007年頃からで、まだ10年程度のことです。都市空間としては世帯減少が一番問題で、最近とくに問題視されている空き家もそうですが、それがここ数年で深刻になってきた。ですから林さんのご専門の農村に対して、都市側ではコンパクトなまちづくりをどう考えていくのか、ということが最大のテーマになっています。

今日の対談は、この号の全体のテーマが都市と農村を一体的に考えるということのようですので、林さんのご専門の農村計画と私の側からの都市計画、それが最終的にどのように融合できるかという方向で話が進んでいけばいいですね(笑)。

林———そうですね(笑)。過疎集落と都市というよりは、農村と都市ということで考えてみたいと思いますが、前提として、では農村と都市は何が違うのか。一つは、農村の構成要素として、農地があることですよね。そして私はこれこそ重要だと考えているのですが、もう一つ、地域固有の知恵の継承ということがあると思うのです。つまり、山の幸を持続的に利用するために伝承されてきた民俗的な知恵、「民俗知」です。見方を変えると、その土地に蓄えられた生業にまつわる知恵が消滅した場合、農村といっても、都市住民向けの農地付き別荘地と大差なくなってしまうということです。そうなってしまっては、農村ということで特段の公的資金を使ってまで維持していく筋合いのものではなくなります。私はこの民俗知の部分が農村の本質だろうと思っています。

では過疎集落にはどんな問題があるのか。これには消えるまでの問題と消えてからの問題という、大きく二つの問題があります。消えるまでの問題は、やはり生活が成り立たなくなること。買い物が困難になるということもありますが、それくらいは、元気であれば比較的なんとかなる。ただ、病気になって日常的な生活が困難になり、さらに病院に行くこともままならないとなると大きな問題となります。また病気がちになると、都会に出て行った子どもたちの家に移住するということもあります。すると「四散する」という言葉がちょうど良いのですが、集落を形成していた地縁がずたずたになってしまいます。

そして消えてしまってからの問題というのは、じつはちょっと複雑で、いわば都市伝説のように「問題」が一人歩きしている側面があります。

その一つが山間の農村が消滅するとコメが不足するので問題だ、という話。しかし実際には、先の2万2502集落の田んぼのシェアは約9.9%です(註2)。日本の場合、現存する田んぼのうち3割以上が主食用のコメづくりには使われていません。ですから、最悪、これらの集落から田んぼがすべてなくなっても、コメは不足しません。

さらに、集落に人が住まなくなると、土地が荒廃するともいわれます。まあ、確かに「荒廃」はするのですが……「荒廃した土地」というと、どういうところを思い浮かべますか?

姥浦——木が無秩序に生い茂って林の奥は真っ暗になって、朽ち果てた建物をツタが覆っている……というイメージですかね。

林———そうです、リアルですね。この質問をちゃんとフィールドに出ておられる姥浦さんにしたのが間違いなんですが(笑)、一般の都市居住者に同じことを聞くと、草木も生えない荒涼とした岩場、あるいは、中国奥地の砂漠のような場所をイメージされることがあるのです。ですが今おっしゃった通り、降水量も多く、気候にも恵まれ

た日本の自然環境では、どうがんばっても森に戻ってしまう。さらに、河川の上流に暮らして水を管理する人がいなくなると水害が起きるから問題だといわれることもあるのですが、それも都市伝説で、実際にはそんなことは起きていません。

ただ、これはあまり言われていませんが、生物多様性が低下する可能性があります。農村は二次的自然なので人間の手が入ったものです。それが、姥浦さんが正確にイメージされたような森に戻ってしまうと、動植物の生息環境は単調になり、生物多様性が低下します。では、それで何が困るのか。一つには、遺伝子資源の多様性が低下します。これにより、たとえば食物の品種改良とか、新薬の開発などに何らかの悪影響が出る可能性があります。

それと、先ほど申し上げた民俗知消滅の可能性があること。私はこのことが、ダメージとしては最大だろうと思っています。

都市・農村の持続可能性

姥浦――都市側の問題として、先ほどもコンパクトなまちづくりをどう進めていくか、ということを言ったのですが「コンパクト」といっても、必ずしも空間構造が小さくまとまっていれば素晴らしいというものではありません。やはり重要なのは、持続可能な町をどうやってつくっていくのか、ということです。

私たちは10年ほど前から「東北発コンパクトシティ」ということに関して、自治体と一緒になって勉強会を行っているのですが、いわゆる都市部で考えるコンパクトシティと、東北のように農山村が後ろに大きく控えている地域でのコンパクトシティでは、同じ言葉を使ったとしてもアウトプットがまったく違うんですね。本来は、都市でも同じなのかもしれませんが、都市部と周辺農村は両方重要で、一体として考えていかなければならない。この時、周辺農村を全部含めて都市部に集約しましょうという話ではまったくありません。ところが、コンパクトというと、どうしても根強く誤解があって、地方ではもし首長さんがそんなことを言い出すと必ず選挙で落ちるんです（笑）。ではこの時、周辺農村の、とくに基幹的な集落をどうやって維持していくのか、そこには当然、林さんが指摘されている知恵の伝承のような、ソフト的な部分も含まれるわけですが、それをどうやって都市とネットワークさせていくことができるか、また、ハードとして道路や交通網、お金の流れ、人の流れ、いろんな意味で持続可能なコンパクトシティをどう築けるか。なかなか具体像が描けません。単に町を小さく、シュリンキングしていけばいいという話ではないわけですから。

何より、ここで一つやっかいなのは、都市は拡大していった時と縮小しつつある時の構造が異なるということなんです。

そもそも、最も古い町はだいたい真ん中にありまして、その後少しずつ、町は外側に拡大していきますが、そのイメージは三重構造です。中心市街地があって、そのすぐ外側に戦後間もなく開発された町、その外側にはロードサイドに大型店などが建つ、近年開発された町がある。そして農村は、さらにその外側です。

真ん中のコア部分は、1960～70年代に郊外が開発されるのに伴い、ドーナツ現象と呼ばれるように一度は衰退してしまったところです。ただ近年は、もともと町の歴史が蓄積された場所ですし、人々の意識が変わり、技術的なことも進歩してきたため、まだ十分とはいえませんが保存や再生が進んできた部分もあります。その外側、第一期として戦後すぐに開発されたような町は自然発生的に広がってしまった感もあり、道路も狭く、住宅の質も余り良くない。住民も高齢化していますので、ここから人口が減っていき、空き家が増えたりもしています。一方、一番外側の新しい町は、もともとは農耕地でしたが、そこが宅地開発され、道路網が整備されて新しい家が建ち、若い夫婦が暮らして子どももたくさんいて……といった、比較的質のいい町になっている。ですから、いくらコンパクトだからといって、それなりに充実した一番外側の町から内側へと集約していこうというのは、無理があります。

そのうえでコンパクトな町をどうやってつくっていくのかという時に、やはり、都市の中心だけを考えていてもダメで、さらにその外側に広がる農村も含め、一体的に考えていくことが非常に重要です。ですから都市計画とはいえ、狭い意味での「都市」だけではなく、これもすべて含めた「空間」として土地利用を考えていく必要がある。もはや「都市計画」ではなく「空間計画」というべきなのかもしれません。

林――なるほど。中心のすぐ外側が問題を抱えていて、その外側は比較的健全だという構造は、今まで考えたことがありませんでした。非常に興味深いお話です。

姥浦――私は現在、東北での復興まちづくりにも携わっていますが、そういうなかで、やはり、必ずしも都市に全部集約していけばいいというわけではありません。今回震災にあった地域は三陸地方沿岸にズラッとありますけれど、それらもいくつかの類型に分けることができます。たとえば、一つは三陸の漁村です。そこには、もともと十数戸しかなかったところから、50戸、100戸くらいの集落もありますが、それぞれ、一つひとつの浜に漁港があって、その後背地の低地や斜面地に住居があるという土地利用でした。一方、仙台平野を形成する沿岸部に広がっているのは農村です。ただ、仙台の場合は市街地からもそれほど離れていないのでニュータウン的な部分も多く、荒浜地区などではおよそ7割はそういった新興住宅地になっていました。この他に、石巻のような比較的大きな都市部もありますから、一口に被災地と言っても、大きく分けると漁村、農村、都市という三つのタイプが存在します。

そういうなかで、どういうところが集約化したか、できなかったかというと、比較的うまくいったのが――本当にうまくいったかどうかの判断は難しいところですが――都市部と農村で、いくつか集団移転をしてコンパクトな町を再構築している事例があります。ですが、漁村ではほとんど集約化は進んでいません。ゼロといってもいい。それというのも、先ほど林さんが過疎化を五つのタイプに分けましたが、そのうちの五つ目、産業をどう考えるかというところが大きい。漁村集落の方々は、やはり海から離れるわけにはいかないんです。都市住民からすると、少しくらい離れた場所に住んでいても、通勤してくればいいんじゃないかと思うのですが、日々、海の状態を見ながら仕事をし、暮らしを成り立たせていた人たちにとって、それは難しいことなのです。また漁場は農地と違い、ここが自分の場所だということがありません。もちろん、漁師さんたちにはそれぞれテリトリーがあるらしいのですが、地上ほど境界が明確ではない。ですから、自分がいない間に別の人が自分のテリトリーを荒らすのではないかという懸念が常にある。そういった心情的なものも含めて、海から離れて暮らすことは難しいんですね。

さらに、仮に心情的な部分を置いて、たとえば、新たに用意された高台の基幹集落に暮らし始めたとしても、やはり海から離れることで個人の生計が成り立ちづらくなる。すると被災者として、収入にしても、家にしても、公的な補助を受けなければ生活できないという状況に陥る可能性があります。それは果たして正しい選択なのかどうか。

また先ほど9戸以下の集落の存続の厳しさをおっしゃったんですが、漁村だと、それくらいの集落でうまくやってきた場所はけっこうあります。ただ、次の世代まで考えると続かないという課題は確かに残ります。

林――やはり産業構造や特質は、コンパクト化を左右するようですね。

林直樹
はやし・なおき―1972年広島生まれ。東京大学大学院農学生命科学研究科特任助教。特定非営利活動法人国土利用再編研究所・理事長。京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了、博士（農学）。専門は農村計画。編著書に『撤退の農村計画　過疎地域からはじまる戦略的再編』（学芸出版社、2010）など。

生き残るための「丁寧な選択」

林――その産業構造に関連して、今の農村の配置が本当に合理的なのかどうか、考える余地があると考えているのです。つまり農業集落の地理的な位置は、かつてクルマもなく、通信手段も手紙くらいだった時代に最適化されたものから、あまり変わっていません。おそらく漁村もそうではないでしょうか。ですから、農山漁村の空間構造が、今の時代にあって本当に適正なのか、とくにコンパクト化を考えるうえでは、改めて議論したほうがいいのではないでしょうか。

建築学会の『建築雑誌』（「山間の小集落における縮拓論」、2016年1月号）に寄稿したのですが、先ほど姥浦さん

姥浦道生
うばうら・みちお―1973年富山生まれ。東北大学大学院工学研究科准教授。東京大学大学院博士課程満期退学、博士（工学）。専門は都市計画・土地利用計画。共著書に『都市・地域の持続可能アセスメント　人口減少時代のプランニングシステム』（学芸出版社、2015）、『東日本大震災　復興まちづくりの最前線』（学芸出版社、2013）など。

がおっしゃったような、将来的に、本当に持続可能な町や村を考えるうえで、少しでも多くの青写真を描けないかと考えてみたんです。これは試論ですが、まず集落を構成する要素として「1.通年居住」「2.耕地」「3.民俗知」「4.住民のまとまり」という四つに注目しました。単純に考えれば、この組み合わせによって16種類の青写真が描けるわけです。そこで、集落が現状のまま維持できないのだとしたら、この4要素のなかから、諦めるものを丁寧に選んでいくしかない。そういう提案です。

実際に、1を諦めて集団移転した集落に、秋田県北秋田市の小摩当（こまとう）地区があります。集団で、まとまりを保持したまま移転しましたが、耕地の多くは今も守られています。

さらに一歩進んで、1と2を諦めた場合、たとえば、獣害がひどく耕地を維持できないようなケースですが、それでも、住民のまとまりがあり、冒頭でも申し上げた農民としての民俗知も保持されやすい。私が実際に知っているなかでは、鹿児島県阿久根市本之牟礼（ほんのむれ）地区の集団移転がこれに近いと思います。これらのケースから見ると、「まとまり」が保持されると、集落の人々の安心感が高く、移転者自身の満足度は高いようです。また、現代の建築や土木の技術をもってすれば、一度荒廃してしまった耕地を元に戻すのはさほど難しいことではありません。「まとまり」がある以上、集落を再興する可能性も残ります。したがって、さらに「民俗知」が失われても、「まとまり」があれば集落自体は保持できるとも考えられますが、先ほども申し上げたとおり、「民俗知」が失われるのは痛い。

私は「民俗知」は国民的な「保険」だととらえています。つまり、今は食料にしてもエネルギーにしても、海外からいくらでも入ってきます。そんな状況が未来永劫続くのであればいいのですが、万が一、今後、食料とエネルギーの大量輸入という道が断たれた場合、身の回りにいくら自然が残っていても、都市住民ではそこから食やエネルギーを取り出すことは困難で、資源として活用できない。そういう将来の「保険」として、農村と、そこに蓄えられた民俗知を維持することを考えた方がいいと思います。

姥浦――ですがそういう民俗知は、博物館に収蔵して守れるようなものではないですよね。

林――ある程度、実践していかなければならないと思います。そのためには拠点集落、これを私は「種火集落」といっているんですが、そういう集落を形成し、地域の代表として民俗知を守っていくことも考えておく必要があると思います。ただ、常々不満なのは、民俗的な伝統というと、祭りのようなものばかり取りざたされることです。それよりももっと、藁の加工法とか、食べられる雑草や薬草の知識とか、そういう民俗知を残すことの方が遥かに重要です。

姥浦――あまりに当たり前すぎて残らないという部分がありますね。ただ、今や農村といっても生活は都市化していますし、作業も工業化している部分が多いのではないですか。

林――おっしゃるとおりです。山野の恵みを引き出すという知恵は、風前の灯火になっています。

都市・農村が連携した空間戦略の必要性

姥浦――集落の移転に関し、震災復興でも同じようなことがあるのですが、例に挙げられた1を諦める場合、その移転先は、具体的にどのような場所になるのですか？　住まいは公営住宅ということになるのでしょうか。

林――いろんなパターンがあります。鹿児島の本之牟礼地区の場合は、集落側から自治体に移転したいという話をして、市が移転する候補地をいくつか探したんです。確か、市が予備的にとっておいた土地があったので、そこに入った、ということだったと思います。ただ、住まいは自分たちで建てました。そうは言っても、いろいろと補助金がつきましたので、住民の負担は比較的軽かったと思います。

姥浦――山間から都市側の集落に集団で移ってくれれば、道路もそうですが、水道やガス、電気という社会インフラ、そして医療に関しても、さまざまな社会サービスを提供しやすくなることは確かです。また、東北のように雪の多い地域では除雪費用も相当かかりますから、それを省きたいという思いもある。ただ、だからといって本当に集約した方がいいのかどうか、あるいは、先ほど林さんは逆の意味でおっしゃいましたが、移動手段や通信の技術が発達してきているなかで、従来とは違う形ででも、過疎地や離村に社会的なサービスを提供することができるのではないか。個々人の考え方やライフスタイルもありますから、それを棚上げしてまで変えていかなければならないものなのかどうか。多面的な視点から、本当に持続可能な町や村を存続させるにはどうすればいいのかを考える必要があると思います。

林――確かに。それと、やはり都市・農村計画の本当の意味での連携が必要です。従来、どうしても農村計画の方では、都市を人とお金を引っ張ってくるところだと考えている部分がありますし、都市計画の方では農村を背景の緑地くらいにしか思っていない部分がある。それではうまくいきません。

それに最悪の場合、山の中の集落が都市部に集団移転してきたとして、今度は都市側がコンパクトシティだからとさらに中心に集めることになってしまったら、二段階移転することにもなりかねない。都市計画としてここまではしっかり守りますと言ってくださると、我々農村計画側も、移転するならこの辺りがいいんじゃないですか、と自信をもって言えるんですが、今は、都市は都市で揺れているので、ここなら絶対大丈夫と言いにくい、というところがあります。

姥浦――それを考えるのは、やはり都市計画だけでは無理で、おっしゃる通り、都市・農村計画なんですよね。自治体のなかで全体的な空間戦略をどうするのかを考えることが重要で、中心市街地をどうするかという話と、農村や集落をどうするかという話を別々に考えてしまうと、結局はおかしな話になります。

ところで、冒頭で9戸以下の集落が1771あるというお話でしたが、これが今後どれくらい移転し、集約されていくとお考えですか。

林――じつは、あまり起きないと思っています。集落移転が最も多かったのは1970年代で、過疎地域集落再編整備事業で移転した場合に注目すると1970年前半で100、後半で80くらいの集落が移転しています。ですがその後はガクンと減少し、1980年代で21、1990年代では3の集落移転に留まっています（註3）。ですから、人口がゼロにならないという意味であれば、相当数はまだ残るんじゃないかと思います。

姥浦――逆にいえば、やはり道路網が整備されて、最低限の社会サービスにアクセスできれば、それほど困らないということですね。

林――クルマさえ使えればなんとかなるというところで、ストップしちゃうんですよね。それが叶わなくなった時に、初めて問題が顕在化する。

最初に姥浦さんがおっしゃった通り、過疎の問題はかなり前から考えられてきています。ですから農村側は、国全体の人口が減少する時代に突入したという話を聞いても、ウチはそれよりずっと前から減っているからあまり関係ない、といったスタンスです。しかしこれまでの過疎は、ある意味、とても恵まれた過疎だったのです。つまり、局所的に人口が減ってはいても国全体の人口は増えているため、中央政府の収入はどんどん増えていた。おかげで過疎地が困っているとはいえ、中央から地方へのお金の流れはよかったわけです。ですが、国全体の人口が減るということは中央政府の収入も減りますから、従来のような期待はできません。農村の方では同じようなつもりでいても、過疎問題は、まったく違うステージに入っているのです。このことをきちんと理解している農村は少ない。

ですから、雪崩的に集落がなくなってしまう前に、選択肢としての撤退を保持しつつ、戦略的に将来像を考える必要があると思うのです。それは当然、都市にとっても無関係なことではないはずです。

註1,2―出典：農林水産省統計情報部「2000年世界農林業センサス：第9巻農業集落調査報告書」（農林統計局、2002）
註3―出典：国土庁地方振興局過疎対策室「過疎地域等における集落再編成の新たなあり方に関する調査報告書（平成12年3月）」（2000）

上—Via S.Lazzaro(a Est) サン・ラッツァーロ通り(東側)
下—Via S.Lazzaro(a Ouest) サン・ラッツァーロ通り(西側)
Barletta バルレッタ

対談—❸

都市の潜在能力

ロスト近代・ヘテロトピア・自然の多産性

東京は、高度成長期からバブル崩壊まで、ケインズ主義的な都市政策、郊外化の拡張過程で成長を果たした。個人はマイホームやクルマをローンで購入し、生活は債務を負い、それを解消するという軌道の上を動くことになる。だが、1990年代に入るとバブル崩壊の過程で、膨大な不良債権問題があらわになり、戦後の土地本位制的な資本主義の基盤である土地が流動性を弱めていく。いかにして土地を流動化させていくか。コンパクトシティや都市再生といった問題意識は、まさにそうした文脈から出てきたものだったと内田隆三氏は言う。

一方、1999年に石原都政が誕生すると、都市再生をうたい文句に、いったんは郊外へ向かったベクトルを逆に都心の方へ折り畳んでいくという真逆の政策に転換する。結果、日本全体が人口減少へと向かうなか、東京だけが人口を増大させていく。なぜこのようなねじれ現象が起こったのか。「近代」、「ポスト近代」、「ロスト近代」という時代区分で、戦後の日本社会をとらえ直す橋本努氏と内田隆三氏に、潜在能力をキーワードに、都市の変貌と社会空間の変容の関係について語り合っていただく。

Photo:坂本政十賜

内田隆三
東京大学名誉教授

×

橋本努
北海道大学大学院経済学研究科教授

ジェントリフィケーションの意味するもの

内田——都市の潜在能力に関する議論と深く関係しますので、まず、ジェントリフィケーションについて、橋本さんのご意見をうかがいたいと思っていました。橋本さんは、ニューヨークの大学におられて、私よりも事情に詳しいと思いますが、たとえば、マンハッタンのコロンビア大学がキャンパスの拡張計画に着手した時、フランコ・ラ・チェクラは、コロンビア大学はハーレム地区のジェントリフィケーションに貢献し、その意味で、不動産会社のように機能していると批判していました。ジェントリフィケーションは、都市を中流ないしより上流の人々の志向に合わせてきれいに再生するものなので、ニール・スミスのように、白人支配層による都市の奪回の試みと見る人もいます。私の場合、重要だなと思うのは、土地や住宅市場の変化と結びつきながら、そこに衛生学的な浄化の論理が働くことです。ジェントリフィケーションは、都市の再開発の視点から要請されるのですが、他方で、その場所に暮らす人々とそのさまざまな価値観からすると、一種の排除の論理に見え、批判されることにもなります。

ニューヨークの例でいえば、ジュリアーニ市長の頃から警察の取締りが強化され、湾岸戦争前後の頃に比べると治安は改善し、マンハッタンは安全な場所になっていきましたし、それは都心の再開発も促しました。911テロを経て、2002年以降のブルームバーグ市長の時代になると、大規模な都市の再開発が進行して町も変化していくわけですが、その過程で、マンハッタンを訪れるツーリストや消費者の視線が優先し、都市空間が商業主義とブランドやホテルやショッピングモールなどの現代的な要素を多く含むようになっていきます。都市空間が外部からの視線によってきれいに洗われていくわけで、この再開発の過程にもジェントリフィケーションの論理が垣間見えるように思います。

橋本——私がニューヨークにいたのは、2000年から2002年までの2年間で、初めはマンハッタンの郊外に住んでいたのですが、あいにく家が火事になってしまって、マンハッタンのソーホー地区に引っ越したんです。ソーホー地区は、マンハッタンの南側に位置し、もともとは倉庫街だったところです。それが産業の衰退で廃墟のようになっていたのですが、いわゆるアーティストたちが住むようになり、ギャラリーやショップができて、一種の文化の発信基地に変貌したんです。私が借りたアパートは、オーナーがミュージシャンの久保田利伸のマネージャーをやっていた人で、そうしたミュージシャンやクリエーターが絶えず出入りするような面白いところでした。ただ、すでにソーホー地区は、観光スポットとして旅行ガイドブックにも登場するようなマンハッタンでも有数の人気エリアになっていまして、地価がものすごく上がっていた。それが2000年以降さらに高騰して、ギャラリーはもとより、ファッションブランドのショップでさえも出店できないような状況になった。この状況は、ジェントリフィケーションの第2段階にあたると私は勝手に思っているんですが、こうなるといわゆる高級住宅街になってしまって、もはやアートやカルチャーの情報発信の場ではなくなります。

これは、じつは資本の側にとっても危機なんです。ジェントリフィケーションというのは、簡単に言ってしまえば、すたれた町をきれいにすることで人や資本を呼び込むことです。一種の都市戦略ですが、高級住宅街にすることが目的ではありません。文化資本を創造することで、町を活性化させるのがジェントリフィケーションであるとすれば、この第2段階のジェントリフィケーションは、単にデベロッパーを儲けさせているだけです。私に言わせれば、デベロッパーの資本の論理では、都市再生は最適化できない。本気で都市再生をやろうとするならば、文化資本を育てるべきです。

2014年の段階ですが、ユネスコが世界41カ国に呼びかけて、クリエイティブシティを認定し、相互交流を積極的にはかろうとしています。私の大学のある札幌市は、一昨年「創造都市さっぽろ」を掲げて、ミュージシャンの坂本龍一の協力もと、2カ月間にわたってイベントをやりました。内外のアーティストやクリエーター、さらにはIT産業に携わる若い起業家を巻き込み、けっこう盛り上がりましたが、こういう試みこそ都市再生には必要だろうと思いました。

内田——ジェントリフィケーションというのは、ロンドンの労働者階級が住む地区で、疲弊した建物を建替えるなどして、ミドルクラスの生活標準を充たすものに変えていったのが始まりですね。それから、ソーホーのように、アーティストや才能ある人たちを巻き込んで文化や消費の発信地のような場所になっていくというタイプも出てきますが、橋本さんがおっしゃられるように、都市と、資本や人間との結び付きを、どのようにポジティヴなものにするのかが大切だと思います。

ジェントリフィケーションに経済政策やデベロッパーの論理が強く関係すると、生活者の視点から都市を住みよく面白くするというよりも、商業主義的な都市の再開発や、経済成長ための都市再生という面が強まっていきますね。人間の多義性や潜在能力から見れば、成長中心の単調な開発の論理は、都市のジェントリフィケーション、そして管理統制や衛生学的な浄化の動きと結びつく可能性があります。今、札幌市での興味深い取り組みを紹介していただきましたが、都市をある価値観でただきれいに白くするだけのジェントリフィケーションではなく、橋本さんが注目される、人間の潜在的な可能性やクリエイティヴィティと結び付くような都市のありかたがもっと模索されればと思います。

都市の理想としてのヘテロトピア

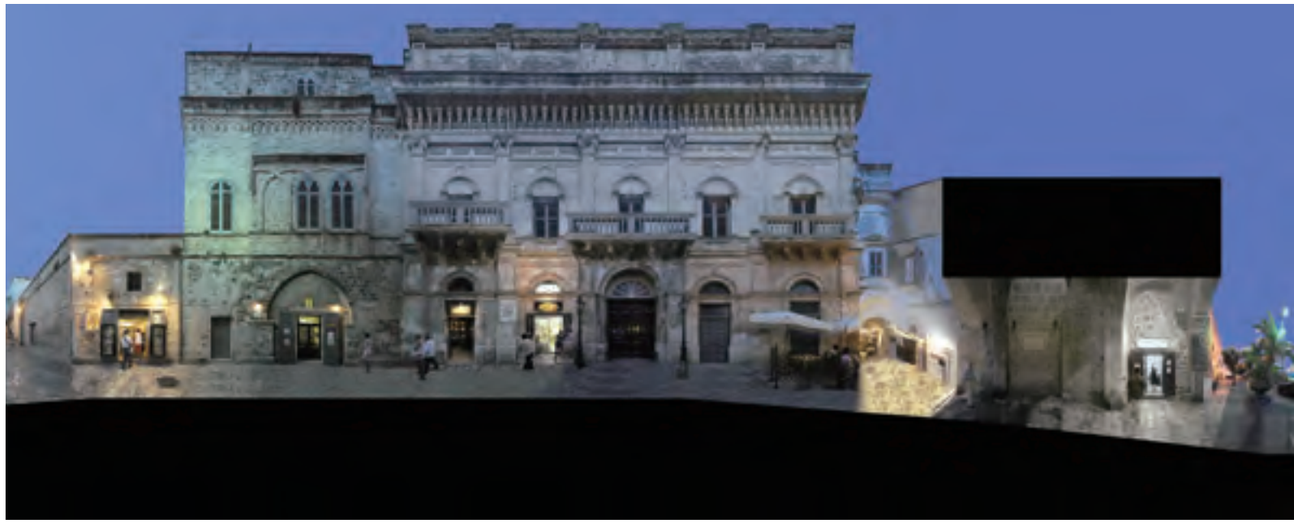
橋本――今の話を私なりに解釈すると、浄化しない、あるいは浄化させない都市再生は、いかにして可能かという問い掛けだと思います。1970年代に対抗文化の文脈から歩行者天国が出てきました。日本には、欧米社会にあるような大きな公共空間、たとえば広場のようなものがなかったわけですが、そこに登場したのが歩行者天国でした。歩行者天国は、当時のラディカル左派にとって、対抗文化のシンボル的意味をもっていたと思うんです。もっとも、権力側から見れば、それは一種の抑圧のためのガス抜きであって、対抗文化が言うほど積極的な意味にはとらえていませんでしたが。

ジェントリフィケーションの進行で高級住宅街化してしまうと創造性をかえって失うことになります。これは言い換えれば、都市からヘテロトピアの要素がなくなるということを意味しています。ヘテロトピアとはユートピアの対立概念で、互いに反駁し合う要素が同居するような、異種混合的な空間を指しますが、イギリスの地理学者デヴィッド・ハーヴェイによれば、ヘテロトピアこそ都市の理想だというのです。異種混合的というのは、要するに両義的であるということで、たとえば資本主義に準拠しつつもそれとは相反する志向を同時にもつことで、創造性を発揮することができるというわけです。資本主義をドライブする創造資本をつくり出しはするけれども、真逆の対抗文化も生成させてしまう。ヘテロトピアのそうした両義性こそが都市空間にはなくてはならないものだという議論です。これは、近年盛んな公共性の議論とも重なるものです。

内田――都市空間のなかにヘテロトピアの要素をどう取り込むのか、そして公共の場や誰にも開かれたコモンズの領域をどう創造し、都市のなかにどう組み込んでいくのかという問題ですね。この課題の達成は、デベロッパー中心の論理によるジェントリフィケーションではなかなか難しいですね。たとえば都市再開発で高層ビルを建てて容積率を上げるために、公開空地を広めにとり、それが結果的に市民のためのコモンズになるという例があります。丸の内にもその種のコモンズがありますが、重要なのは、この種のコモンズ的な空間がジェントリフィケーションのもつ浄化の論理とどんな関係をもち、またどんな限界をもっているのかをきちんと検証することですね。

管理と浄化が中心のジェントリフィケーションでは、今、橋本さんが指摘されたヘテロトピア的な要素は抑えられるでしょう。都市が人間の集住する場所である限り、異質な他者や危険な要素を抱え込みますが、この種の他者性の発生は、安全・安心のユートピアの追求と表裏をなしていて、どちらのベクトルも限度を超えると、ヘテロな活性力や潜勢力の場を損なうように思います。

現代社会はセキュリティへの関心が高く、都市生活における監視や管理のシステムが高度化されています。そうせざるを得ない原因が正確には不明なので、ともかく結果に対して社会防衛的な力が強まるわけです。過剰に安全・安心なものと、過剰に危険な要素が同居している、ストレスの大きい社会ですね。



La Sezione del Tessuto Urbano(a Ovest)/Polignano a Mare
都市組織の断面図(西側)／ポリニャーノ・ア・マーレ

もう一つ気になるのは、都市に対する我々の想像力の働き方です。我々の社会は、都市の現在性や現代的な価値を大きく見積もりすぎているように感じます。都市や住むことへの想像力は、我々の歴史との関係の反映でもあるのですが、今では、現在の時間を実際の歴史から切り離し、商品化された、きれいな現在を見ようとする視線が強く働き、そのために何かを忘れているように思う時があります。ジェントリフィケーションの進展もこういう文脈のなかにあるのかもしれません。

アレゴリーという方法

橋本――私の出身というか幼少期を過ごした町は、多摩丘陵を東急が大規模開発した「たまプラーザ」で、突然ブルトーザーがやってきてつくってしまったような郊外のニュータウンです。スタジオジブリ制作のアニメ「平成狸合戦ぽんぽこ」の舞台となった場所のイメージに近い。まさに、今、内田さんがおっしゃった意味での歴史性が皆無な場所です。歴史がないということは、世代間のつながりもありません。そういう郊外で育った1970年代以降の私たちのような世代――私はとりわけ「バブル世代」なのですが――は、いったい自分はどういう出自の人間なのか、常に生の不安のようなものを抱いていました。

内田さんは、そういった郊外には、ガウディ風の公園があったりして、一見よさそうな空間に見えるとおっしゃってます。当時は人気TVドラマのロケ地としてもよく利用されました。しかし、所詮それらは記号の断片であることには変わりなく、非常に底の浅い、つまらない空間だと思っています。世代間のつながりがないというよりも、単一の世代しか住んでいないので、そもそもタテのつながりというものがない。また、町割りや道路計画が画一的であるために、町の隅々まであらわになっていて、監視社会的にはとても都合がいいのですが、町としての魅力は希薄です。何より、隠れ家的な場所がない。いわゆる下町的なごちゃごちゃした空間や盛り場がなくて、とても息苦しい、と。

確かにこういった批判は、決して新しいものではなく、かつてからよく言われていたことです。では、どんな都市が望ましいのか。どんな郊外を理想と考えているのか。仮にそう問われたらなんと答えるでしょうか。私は、その答えの一つが、新保守主義ではないかと思っています。アメリカでは、1980年代後半に新自由主義が猛威をふるいましたが、その後に登場してきたのが新保守主義、いわゆるネオコンです。共和党を地盤とする保守の人々の多くは都市中心部というよりは郊外に住んでいて、日本人と同じような感じをもっていたんじゃないかと思うんです。私もその一人でしたが、郊外生活者の誰もが感じる不安のようなものを、アメリカの郊外生活者も同様に抱いていたんじゃないかと思ったわけです。

先程言いましたように、ラディカル左派はむしろそこにヘテロトピアの可能性を見出そうとするのでしょうが、ネオコンは、基本的にヘテロトピアには反対です。内田さんは、もちろんネオコン的な考えには批判的だと思いますが、あえて取るとしたら、どのような立場でしょうか。

内田――東京の「郊外」の拡張に関してはケインズ主義の傾向を、また「都心」の再生に関してはケインズ主義的な色調と同時に、それに癒合した新自由主義の匂いを感じます。それらの限界や問題点を知ることがまず大切だと思っています。「郊外」にヘテロトピア状のものをつくり出した想像力に対しては何か興味深いものを感じますが、批判すべき点も多々あると思います。「都心」の再生の方も、格差の問題、浄化の問題などと関係しており、新たな隔壁が社会内に増殖しているように感じます。新保守主義のある部分は、この隔壁の増殖と関係しているかもしれません。

話はちょっとズレますが、芥川龍之介に「大川の水」という小品があります。大川というのは隅田川のことで、江戸＝東京というのは大川沿いに発生した都市でもあります。芥川は、たとえば歌舞伎や江戸浄瑠璃、狂言など、水辺の町の情景がもっているさまざまな物語に耳を傾けるのですが、それは歴史を通して町に向き合う仕方の一つです。言い換えると、大川の水辺の情景をさまざまなアレゴリーを通して見ることであり、それらのアレゴリーの意味を探ることですね。

橋本――アレゴリーとしての意味ですか。

内田――ええ、アレゴリーと言ったのは、それが現在と過去をつなぐ視点を提供すると思ったからです。アレゴリーは普通抽象的な観念を具象的なものを用いて比喩的に示すことを言いますが、ヴァルター・ベンヤミンという思想家は「歴史のなかの現在」をとらえるためにアレゴリーという言葉を用いました。我々が生きた「過去」の事実は、単純になくなるのではなく、かつてあった関連を失いながらも、小さな断片やもう誰も振り向かない瓦礫のようなかたちで、町や家のいろんなところに存在しています。現在の生活のありようを相対化するために、これらの古い断片に意味を見出す時、それらはアレゴリーになります。アレゴリカルな視点があるとすれば、それは過去と現在のゲームを蘇らせることであり、それが未来につながる何かを生むのではないか、そのように思っています。

実際、歴史の現在にはそのような過去の断片が無数に浮遊していて、現在の生のありように微妙な陰影や曲率を与えていますので、都市の開発も、こうした歴史の奥行きをどう扱うのかが問題ですね。芥川の作品は、大正時代の他の作家に比して、その未来により長く生き残ったように思いますが、彼の東京の記述は、私からみると、アレゴリカルな記述のように思うのです。歴史との関係でアレゴリーの希薄な町というのは、時間の感覚をうまくもっているのかどうか、と思います。この点、マンハッタンより、東京の方が歴史的にさびしいものを感じさせることがありますね。

郊外とマイホーム主義

橋本――ところで、内田さんはご著書『国土論』で、マイホーム主義を分析されていて、大変興味深い指摘をされています。高度成長期に若い夫婦は郊外に生活の拠点を見出し、そこで理想の家庭づくりを実践します。マイホームの特徴は、家庭生活と性（セックス）が同一化しているところです。戦後社会において性的な混乱が顕在化するなかで、マイホームはまさにそのアンチテーゼとして機能したのではないかという指摘です。健全な社会のあり方をマイホーム主義の実践として表現していく場所が、まさに郊外だったというのです。

私がこの指摘に注目するのは、そうしたマイホーム主義の実践として築かれた郊外の家庭が成熟していく過程で、消費社会の担い手である主婦層が生み出されていったからです。消費社会とは、生産よりも消費によって駆動する資本主義社会のことですが、その担い手は郊外に生活拠点をもつ主婦たちでした。主婦たちは郊外という都市の中心部から幾分離れたところに住居をかまえつつ、消費社会の先頭を走り続けたのでした。

しかし、消費者の典型である主婦たちが、ついに消費に魅力を感じなくなる時がくる。居住空間が消費財で埋め尽くされた時、欲望消費に終止符が打たれます。消費が資本主義をドライブしなくなる。私は、消費が社会を駆動した時代を「ポスト近代」と呼びましたが、1995年頃を境にその「ポスト近代」が終焉し、新たな時代相である「ロスト近代」への転換が生まれます。マイホーム主義は終焉し、資本のフロンティアは郊外から、再び都市へと回帰していきます。2000年代初頭から顕著になる東京の人口増加と、これは見事に符合します。

内田――橋本さんは、「近代」、「ポスト近代」、「ロスト近代」という時代区分をされていますが、いわゆる都市回帰、あるいは再都市化という現象は、

内田隆三
うちだ・りゅうぞう―1949年大阪生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得。東京大学名誉教授。専門は、社会学。著書に、『ベースボールの夢』（岩波新書、2007年）、『国土論』（筑摩書房、2002年）、編著書に『現代社会と人間への問い　いかにして現在を流動化するのか?』（せりか書房、2015年）など。

「ロスト近代」の特徴として検出できるということでしょうか。

橋本――人口の方から見てみると、ベビーブーマーの時代は、文字どおり人口増大社会です。人口が増え続けるとどうなるか。生物学では、端的に競争関係が築かれてしまうといいます。競争しなくてもいいような場面であっても、個体数が過密だと過剰に競争関係を築こうとするのが生物の特徴だというわけです。ところが、逆に人口が減少するとどうなるか。すなわち、人口減少社会になると、必然的に競争圧力は減衰します。つまり、淘汰の圧力がかからなくなる。競争関係から脱して、競争とは別のかたちの関係を結ぶ時代がきたのではないか。それを私は「ロスト近代」と名付けたのです。

「近代」（1945年から1969年くらいまで）を一言で言えば、勤労エートスによって生産性を拡大していった時代といえます。また「ポスト近代」（1970年から1995年頃まで）は、欲望消費によって駆動されていた時代でした。ところが、今、勤労エートスも欲望消費も失速し、代わって人々を駆り立てるのは、あえて言えば自己愛消費です。また、「近代」、「ポスト近代」の基底にあったエミュレーション（emulation＝ワンランク上をめざす競争、対抗意識）が、機能不全を起こしています。他人のことを羨ましく思い、ワンランク上の地位や生活を目指すといった意識が希薄になり、むしろワンランク下を見て自分を慰めるというような風潮すら見られるようになりました。

橋本努

はしもと・つとむ―1967年東京生まれ。横浜国立大学経済学部卒業、東京大学大学院総合文化研究科学術博士号取得。現在、北海道大学大学院経済学研究科教授。専門は、社会経済学、社会哲学。著書に、『学問の技法』（ちくま新書、2013）、『ロスト近代 資本主義の新たな駆動因』（弘文堂、2012）、『自由の社会学』（NTT出版、2010）など。

インフラの上の自然 あるいは自然の多様性

橋本――「ロスト近代」は、「近代」とも「ポスト近代」とも異なる新たな位相であることは確かです。「ロスト近代」は、若者を中心に新たなライフスタイルを生み出します。たとえば、アメリカを例に出すと、スティーブ・ジョブスやビル・ゲイツに象徴されるようないわゆるクリエイティブクラスの生き方、ボボズとも称されるライフスタイルがそれにあたります。ボボズとは、Bourgeois Bohemianのことで、ブルジョア階級のような高所得者でありながら、ヒッピー的なボヘミアンでもあるようなライフスタイルをいいます。ボボズの特徴を挙げると、アメリカのエスタブリッシュメントであるWASP（White Anglo-Saxon Protestant）が「躾（しつけ）」を重んじるのに対して、ボボズは生涯にわたって自己教育を重んじて、むしろ自身から最大のものを引き出そうとします。WASPは、顕示的消費にお金を使いますが、ボボズは、フィットネスやオーガニック商品にお金を使う。たとえば、最高級のトレッキングシューズに数百ドル使ったりします。WASPは、ヨーロッパの貴族的生活スタイルを求めますが、ボボズはマイノリティたちの絵画や彫刻、あるいは音楽を深く理解しようとします。大衆消費社会の手先になることを拒否して、洗練されてはいますが、あまり利益の上がらない商品を探して購入します。さらに、いわゆる「ボヘミアン」とは異なり、喫煙せずアルコールは控え、奔放な快楽主義や退廃的生活を避けます。旅行においても、快適さや癒しを求めるのではなく、たとえば環境保護意識を高めるようなプランを考えます。

ボボズに散見されるこうした特徴を挙げてみると、これまでの欲望消費とは明らかに違ったトレンドがそこにはあるように思うのです。というより、消費という概念それ自体が大きく変化してきたという方が正確かもしれません。これまでの消費は財による自己表現でした。そうしたいわゆるアイデンティティの消費ではなくて、何か自然とかかわりたい、自然に触れたい、自然にやさしい、そういう消費に消費自体が変わってきた。つまり、自分自身の可能性にかけたり、自然と融和したいといった、これまでの欲望消費とは違ったトレンドをそこに見出せるということです。

内田――橋本さんは、ご著書『ロスト近代　資本主義の新たな駆動因』の最後に「自然」の多産性について語っておられます。今おっしゃったクリエイティブ・クラスのライフスタイルにはそうした「自然」への強い親和性が感じられますが、そこでは「自然」のとらえ方がどう変化しているのでしょうか。従来、都市は自然の対立概念として論じられることが多いので、ぜひそこでいわれる自然と都市の関係をお聞かせください。

橋本――経済学者のピーターゼンは、これまで競争というと、価格を巡る競争、マーケット・シェアを巡る競争、品質を巡る競争、自己変革力を巡る競争の四つがあったと述べたうえで、現代社会においては、第5の競争軸、「グリーン・イノベーション」が出現したという議論を展開しています。たとえば、「環境にいいものをつくってくれ」「社会の健全な発展に貢献してくれ」「私たちの子どもや孫にも明るい未来を残せるように行動してくれ」というような、これまでの商品の使用価値そのものによる競争ではなくて、「潜在的な可能性（環境イノベーション）」を喚起する商品を評価するという、新たな競争軸が消費者ニーズのなかから出てきたというのです。

「近代」にしても「ポスト近代」にしても、その根幹には欲望というものが存在しました。人間は誰でも欲望をもっているという暗黙の了承があります。しかし、それとは別に「可能性」というものももっているのです。自分に備わっているはずの「可能性」。それがどういうものなのか、人間なら誰でも、その可能性を知りたいと思うし、また、それを発揮したいと思っている。自らに内在するであろう「可能性」、それが「潜在能力」であり、「自然性」です。「ロスト近代」が、「近代」「ポスト近代」のいずれとも異なる位相だと思うのは、この「潜在能力」や「自然性」を駆動因としているところです。「ポスト近代」までの都市は、どんなかたちであれ欲望消費がその主たる駆動因でした。しかし、「ロスト近代」がつくり出す都市は、人間の潜在能力や身体に内在する自然性を駆動因に発展すると考えられます。もはや、都市は自然の対立項ではなく、むしろ都市は自然とのつながりのなかで共に発展するものと考えるべきでしょう。

内田――現代の都市は単に素朴な自然の上ではなく、人工的なインフラストラクチャーの上に成立するものになっていますが、それでは自然はないのかと言うと、そんなことはなく、技術の想像力と一次的な自然が混じりあい、独自な歴史を帯びることで成立する二次的な自然が都市には横たわっています。人はそのなかで生まれ、それを眺め、それに培われ、それを呼吸し、生きているように思います。マンハッタンの摩天楼も、鉄とガラスとコンクリートでできた人工物ですが、百年の歴史をもっており、じつは人間が生み出した独特の表情をもつ、二次的な自然と見なすことができると思います。ですので、自然という概念それ自体を、人間の多義性や潜在能力との相関でとらえかえすことが重要だろうと思います。都市と自然を対立したものと考えるのではなく、また、自然を、旧来の自然観に押し込めることもないと思います。

橋本――私が「自然の多産性」ということを主張するのは、まさに今内田さんがおっしゃったような意味でです。自分の内部に潜む自然、内的な自然と呼べるようなものに自らを開いていくこと。それが潜在能力であるとすれば、「ロスト近代」の都市とは、まさにその過程において実現するものだと思います。必要なのは、自然に対する想像力です。

内田――自然の存在の深さや広がりを、多角的に、また少し抽象度を上げてとらえてみると、かえって人間的な現実味や表情もった多義的な自然の姿が立ち現れますね。今おっしゃった、人間の条件とかかわる内的な自然や、自然の多産性との関係を深いレヴェルで問うてみると、意外な発見や解決、そして創造があるのではないかと思います。

Parallelismo
パラレリズモ――連続する街並みの魅力

鈴木知之　**すずき・ともゆき**―1963年生まれ。写真家。法政大学エコ地域デザイン研究所兼任研究員、現代写真研究所講師。
明治大学工学部建築学科卒業。東京都立大学工学研究科修士課程修了（建築史）。
山本理顕設計工場勤務後、写真に転向。建築、都市風景などをテーマに制作活動を行う。

この一見、不思議な写真手法は、法政大学の陣内秀信教授率いるイタリア班に同行し、多くの南イタリアの地方都市を巡りながら街を調査研究する過程で生まれた。ちなみにParallelismo（パラレリズモ）とは、イタリア語で「平行」を意味する男性名詞だ。

陣内研究室の調査方法は、地図による平面的調査と、実測による立体的調査の大きく二つに分かれている。まずは準備してきた古い住宅地図などを重ね合わせ、街をくまなく歩きまわりながら過去から現在まで街の移り変わりを読み解いていく。同時に街のなかで典型的な街路を抽出し、メジャーやレーザー機器を用いて詳細な実測調査を行い正確な連続立面図をつくる。これによって街の意匠的な特徴や断面的な構造を調査する。これをデザインサーベイという（図❶）。この二種類の調査に加え、建築内部の訪問調査や、文献・ヒアリング調査などによりソフト面を補うことで、歴史、建築、生活文化、産業など、多角的、総合的にその街を描き出すことを試みるのである。

デザインサーベイの実測作業では、記録写真として建物を順番に1枚1枚漏らさず撮影する必要があった。作業の膨大さに圧倒されながらデータを整理するうちに、ふと「そのままつなげられないだろうか?」と思いついた。Photoshopで歪みを補正し、位置や高さを慎重に合わせて並べてみると、思いのほか簡単につながった。それはまるでジグソーパズルを組むように、見事に街並みが再現されていった（図❷）。デザインサーベイは、建築図面というやや専門的な抽象表現なため、一般の人には伝わりにくい。しかしパラレリズモでは、とくに素材感や風合い、趣きや古さといった、デザインサーベイではできなかったテクスチュアが表現できた。それにより本来街並みがもっている豊かな魅力を、正確かつ詳細に記録することができた。

試行錯誤を重ねた結果、現在では精度も向上し、地形表現を加えることで高低差まで表現できるようになった（図❸）。さらにリアルな写真素材を使うことで、人々の賑わいや生活感といった街の活気や雰囲気までも写し取ることができる。今後、新しい写真手法としてさらに発展する可能性をもっていると考えている。

図❶―デザインサーベイによる都市断面図／南イタリア・オートラント

図❷―制作中のパラレリズモ

図❸―完成したパラレリズモ／南イタリア・オートラント

連載
スキマファイル no.07

**高層ビルが背丈を競い合っている今日この頃、ふと、足元を見れば、隙間がじわじわと増殖中だ。
都市の空洞化を嘆く御仁には、隙間は負の象徴に見えるのだろうが、断じてそんなことはない。
隙間にこそ、都市の未来が隠れているからだ。「都市には隙間が良く似合う」とは誰の言葉だったか。
この言葉の意味を探るべく、都市にスキマを探しに行く。スキマ探検隊、いざ出陣!!**

水都大阪、スキマクルージング
水の回廊を巡る

［今回探検した場所］**大阪市、堂島川・土佐堀川・木津川・道頓堀川**
［ナビゲーター］**泉英明さん**有限会社ハートビートプラン代表取締役／一般社団法人水都大阪パートナーズ理事
［ゲスト］**森田弘志さん**第一生命財団専務理事／弊誌企画委員
構成・写真:**スキマ探検隊** イラストマップ:**小夜小町**

スキマ探検隊とは、サッチン、ユーコ、オマチマン、サヨちゃんを中心に編成されたスキマ愛好家グループ

中之島が都会のオアシスに?!

都市の中心部にあって回廊のようにぐるりと川が周回している都市は世界的にも珍しく、水の回廊と呼ばれます。水都大阪は、まさにその意味で水の回廊と呼ぶにふさわしい都市です。また、水辺は都市に組み込まれた自然であり、存在そのものが「スキマ」といえそうです。そこで今日は、中之島を中心に、（有）ハートビートプランの泉英明さんの案内で、水辺のまちづくりを進める水都大阪の川を巡ります。

❶川の駅としては関西初の施設「八軒家浜船着場 」があるハ軒家浜は、なんと熊野古道の出発点だった!

スキマ探検隊（以後探検隊と表記）―泉英明さんと待ち合わせをした「八軒家浜船着場」（**イラストマップ**❶）のある八軒家浜は面白いところでした。大阪の舟運の中心で、京都と淀川を上り下りする船による物流で栄えたところだそうです。説明板があるので見ていたら驚きました。ここは熊野詣の陸路の基点で、京都などから船でやってきて、ここで陸に上がり熊野へ向かったそうです。物流だけでなく、交通の一大拠点でもあったわけです。現在は、遊覧船などの船着場を含む日本最大級の「川の駅」となっているようです。

森田―じつは20年程前、大阪で勤務していたんですが、その当時の中之島は、いわゆるホームレスの人がたくさんいて、とても近寄りがたいところでした。しかし、今は、芝生が美しい公園に生まれ変わり、まるで「都会のオアシス」。しかも、ばらぞの橋の両岸は「バラ園」です。春・夏には、芳醇な香りと豪華な花が楽しめそうです。

●30分毎に勢いよく水を吹き上げる中之島・剣先噴水。建築家・安藤忠雄の構想から生まれたというが、水上バスの乗客にはウケていた

❷川の風を感じながらお酒やライブを楽しみたい、そんな願いから生まれた「北浜テラス」は、今や水都大阪を代表する観光スポットだ

泉―目の前に見えるのが難波橋。上流

START 1
八軒家浜船着場
京阪電車 天満橋駅
LOVE CENTRAL
水と緑に囲まれた穏いの空間
堂島川
御舟かもめ 4
川に浮かぶ小さなおうち。
定員10名。
過ごし方自由。
水辺の気持ちよさを感じる
小型クルーズ船。
GUEST
第一生命財団
専務理事
森田弘志さん
GUEST
(有)ハートビートプラン
泉英明さん
船長
御舟かもめ
中野弘巳さん
ユーコ
サヨチャン
(旧淀川)
安治川
北浜テラス 2
水都大阪
水の回廊
スキマクルーズ
中之島漁港 5
大阪港発祥の地につくられた
フィッシャーマンズマーケット
大阪港発祥の地でもあり、今ではスキマでもあり…
大阪土成
川は都市のスキマだーっ!!
東横堀川
とんぼりリバーウォーク 7
道頓堀川沿いの遊歩道
とんぼりリバークルーズ 8
道頓堀川のミニクルーズ
だんだん水田
だんだん水田でハマベをつくる
木津川
SUNSET 2117
大阪初のボートハウスバー
陸と海の狭間に浮かぶ それは真にスキマ。
GOAL
京セラドーム大阪
キャナルテラス堀江
道頓堀川
湊町リバープレイス
NAMBA
JR難波駅
通天閣
大正区 9
川に囲まれているため橋を渡らないと入れない。交通機関は、バスと渡し船。
大正駅
世界スキマ発見!
そこの道路は川に近いの道なので水があふれるとゲートを閉めます。
水があふれても店は浮くので大丈夫です。
法善寺横丁

の天満橋と先程通った天神橋とあわせて浪花三大橋として有名です。

森田―対岸の川床があるところが「北浜テラス」（**イラストマップ**②）。かつては川を背にしていたレストランやカフェが、川に表を向けたことが画期的です。

泉―川沿いのビルオーナー、テナント、NPOや地域の人たちが行政と協働して活用している公共空間です。私もかかわっていますが、今後川床をさらに増やして、船もアクセスできる場所にしていきたいと思っています。

森田―難波橋を越すと見えてきたのが赤煉瓦の建物、大阪市中央公会堂。最終的には辰野片岡事務所の片岡安が設計をまとめたとありますが、辰野金吾の意向が強く反映しているようで、どことなく東京駅に似ています。株の仲買商だった岩本栄之助が100万円の私財をなげうって建てたといわれています。大阪勤務時代、仕事でよく利用させてもらいました。

●近代建築が数多く残る大阪、そのなかで定番中の定番といえば「大阪市中央公会堂」。あのヘレン・ケラーもガガーリンもやってきた。我らがオマチマンもここで演奏したのが自慢

③ドリカムとのコラボが話題となった商業施設「中之島 LOVE CENTRAL」は、チャペルもあって結婚式もできるらしい。今日のクルージングはここの船着場から出発です

上④川に浮かぶちいさなおうちがコンセプトの「御船（おふね）かもめ」。オーナー兼船長の中野弘巳さんは元NHKの職員だった人。船が大好きな奥さんの勧めで、起業したという
右上●御船かもめで遊覧中のスキマ探検三人衆。船上は冷えるけど炬燵があるから大丈夫。温かいお茶のサービスもあります
右下●川面から太閤さん（大阪城）を拝むなんて、ちょっとおつだと思いませんか?

オマチマン―ずいぶん前ですが、ぼくもここでコンサートをやったのを思い出しました。

森田―隣りの大阪府立中之島図書館は明治37（1904）年の開館。こちらは住友本家第15代家長吉左衛門が寄付して建てられたそうです。

探検隊―さすが商業の町大阪、面目躍如たるものがありますね。そんな話をしていた時です、中型のチャーター船がやってきて、よく見たら船上で結婚パーティーをしていました。泉さんいわく、ここでは船を使ってパーティーだけでなくいろんなイベントが開かれるそうです。

いよいよ川に繰り出す

探検隊―中之島から橋を渡り堂島川の河岸へ。「中之島 LOVE CENTRAL」（**イラストマップ**③）前には私たちの乗船する「御船（おふね）かもめ」が係留されていました。定員10名のかわいいボートという感じ。オーナー兼船長は脱サラして、船も中古の漁船をDIYしてつくったと言っていました。まずいったん上流に進み、川から大阪城を拝み、ふたたび折り返して中之島の近代建築を側面から眺めました。

森田―鉾流（ほこながし）橋、水晶橋とくぐると次は御堂筋の通る大江橋。この橋は低かったですね。頭をぶつけそうでした。

泉―中之島周辺の橋はみな橋脚が低いので、大型観光船も平べったいでしょ。海に近いため潮の干潮の影響を受けやすく、水位が1.5mも変化することがある。だから、大江橋などはくぐれない時もあるんです。

探検隊―大江橋をくぐってぐんぐん進むと、周囲は高層建築街に。森田さんがカレーを食べによく通った朝日新聞のビルはフェスティバルホールに建替わり、森田さんちょっと寂しそうでした。

森田―堂島川と土佐堀川の合流地点に着き、我々はいったん陸に上がりました。

探検隊―ここは面白かった。だだっぴろい広場のような空間に、テーブルや椅子が無造作に並べられていて、奥には巨大なテントばりの店舗が一棟あるだけ。じつはここ、中之島漁港というフィッシャーマンズマーケット（**イラストマップ**⑤）。テント内にある生け簀には、毎日全国から新鮮な魚介類が活きたまま届けられ、その場で料理をしてくれるというとても楽しい場所でした。

⑤「中之島漁港には、毎日全国から旬の鮮魚が届けられるのよ、すごくない?!」「はぁ、確かに……」

左●オリックス・バッファローズの本拠地「京セラドーム大阪」。大阪ドームとして誕生するもいろいろあって、2006年からこの呼称に。おしりに大阪がつくのは、地元商店街の強い要望があったからしい
右●京セラドーム大阪の対岸、大正区側には台船上のバーやレストランもある

泉―ここは文明開化の時代、外港で隣は外国人居留地でしたが、その後港湾局の管理地になって、近年は使用されず荒れ地同然の場所になっていたんです。それを行政と民間事業者をくっつけて、中之島漁港として復活再生させたのです。都市にスキマを発見し新しい水辺の拠点をつくったわけです。

●道頓堀川水門。親水性の高い遊歩道「とんぼりリバーウォーク」の整備にあわせ、潮位をコントロールするパナマ運河方式が採用された

⑩大阪初のボートハウスバー「SUNSET 2117」の店（船）内。店名は、所在地の番地とのこと

探検隊―まさにスキマ探検隊ですよ。……当初のプランでは、ここから道頓堀川水門を抜けて道頓堀川へ行く予定でしたが、道頓堀川水門の検査とメンテナンスで水門が通れないことが判明。結局、タクシーで戎橋へ移動し、とんぼりリバークルーズを楽しみ、道頓堀界隈、大正区のレトロな大阪を堪能してお開きとなりました。

探検隊―森田さん、今回のスキマクルーズいかがでしたか。

森田―大阪の川沿いには、「憩いの場」としての公園、「働きの場」としてのオフィス街、そして川岸や浮舟などの「スキマ」を活用した飲食街など、いくつもの顔があり、それぞれが地域の歴史を反映し、その特性に応じて、今なお「新しさ」を生み出していることは驚きでした。昔は、「舟運」が発達し、「川と共に生きる人々」という形容詞がぴったりだったと思いますが、今は、「舟運」を受け継ぎつつ、今言った三つの要素が加わって、むしろ「人々と共に活きる川」といった方がフィットするのではないかと思います。水都大阪の川という「スキマ」を通して、「川のもつ魅力」と「川の有するポテンシャル」を再発見・再確認することができました。

⑧道頓堀川をガイドクルーが案内する「とんぼりリバークルーズ」は、今や外国人に大人気。水上散歩の後は、乗船場のあるドンキホーテで爆買がお決まりのコース

左●6代目道頓堀グリコサインの前で楽しそうにポーズをとるサヨちゃん。すべての照明がLEDになって、背景には動画も登場
右●2008年から止まったままの道頓堀ドンキホーテの観覧車、通称「えびすタワー」。サッチンは、開業まもない頃（まだ動いていた）観覧車に乗って、おおいに楽しんだらしい

●複合施設「湊町リバープレイス」の上階にはライブハウスなどの「なんばHatch（ハッチ）」が入っているが、名前の由来は外観がハ角形だからだそうだ

左●まんまレトロなミナミの世情け横丁。全長20mにも満たない、なんともかわいらしい飲屋街である
右●JR大正駅そばホルモンの「忠岡屋」で打ち上げ。たっぷり食べてしこたま呑んで1人1000円は、なんぼなんでも安すぎとちゃう?

連載 第❼回

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

2015年11月、一般財団法人第一生命財団による
第3回「待機児童対策・保育所等助成事業」の助成施設が決定した。
今回は301件の応募から、厳選なる審査の結果42件を選考、2996万円(申請額)が助成された。
そのなかでいち早く、園庭に遊具を設置し、寒さをものともしない子どもたちが、
元気な笑顔を輝かせている東京都世田谷区と兵庫県神戸市の保育園をたずねた。

取材・文:**斎藤夕子**

東京都世田谷区 代沢みこころ保育園

荒れた裏庭を、子どもたちの力で楽しい園庭に

photo:**佐藤真**

子どもたちが整備した園庭

小田急線の地下化、京王井の頭線の高架整備など、長く続く工事によって乱雑な様相を極める下北沢駅。しかしそんな駅を出てもなお、狭く入り組んだ路地に幾多の店が軒を連ねる商店街を、常に大勢の人々がそぞろ歩く町並みはなかなかに複雑だ。それでも駅の東側を南北に延びる茶沢通りを渡れば商業施設はほとんどなくなり、閑静な住宅街が広がる。ただ、道が狭く入り組んでいることに変わりはない。

●高橋純子園長

●住宅街の一角、
狭い坂道の途中にある「代沢みこころ保育園」

2014年9月に開園した「代沢みこころ保育園」は、そんな住宅街のなかにある。定員54名のところ、現在は44名が通う園舎は2面が道路に面した角地に建つが、いずれも道幅が狭く、近隣住宅との距離は近い。このため、当初は屋上をプール遊びの場所などに使用する計画だったが子どもたちの声や物音の響きへの配慮からこれを断念。そこで、保育園を運営する社会福祉法人崇仁会の母体である下北沢の古刹・森巌寺(しんがんじ)の裏庭、子どもの足で2～3分の距離にある土地を園庭とすることになった。

●森巌寺は1608(慶長13)年建立の古刹。
その裏庭を、みんなの手で整備した園庭

●温かな日差しが注ぐ保育室でのランチタイム

ただその裏庭は、うっそうと草木が生い茂る薮のような場所だった。もちろん、業者を入れて整地をしたものの「地面には石や木の根がゴツゴツしていて、とても子どもたちが安心して遊ぶことはできない状態でした」と高橋純子園長はその様子を振り返る。

そこで、開園当初は合わせて3名しかいなかった5歳児と4歳児の園児と職員が一緒になって、石拾いをしたり、木の根を掘り返したりしながら、自分たちの手で、さらなる整地を行った。

「3人は石拾いも遊びの一つとして、楽しみながらもとてもがんばってくれました。おかげで、小さい子どもたちが安心して遊べる園庭をつくることができたんです」(高橋園長)

●砂が山盛りになった大きな砂場で、
思い思いの創作を楽しむ子どもたち

そこに象さん型の滑り台と鉄棒を設置し、園庭としてのベースが整った。3名の園児に感謝を伝える意味も込めて、完成した園庭のおひろめ会を開催。この時3名は、代表でテープカットも行ったという。それが2014年11月。そして2015年度は、園庭をさらに充実させようと、全園児総出で園庭の一角を掘り起こし、花壇と砂場づくりを行うこととなった。その整備を進めている最中に「待機児童対策・保育所等助成事業」の存在を知ったそうだ。

「できた!」が子どもの自信を育てる

「自分たちの手で地面を掘り起こし、次々と出てくる石ころや木の根っこを片付けながらの作業は、大人でも大変。ですが予算も限られていましたから、できるだけ自分たちの手で作業をし、砂場の囲いにも、不要になっていた亀の形をしたブロックを再利用しようしていたんです。それが今回助成をいただくことができたので、砂場枠はプラスチック製の丈夫で安全なものにできました。また砂場の底には防水シートを張り、新しい砂をたくさん入れることもできた。おかげで、とても立派な砂場が完成しました」(高橋園長)

じつはこの他に、助成を使って小さなブランコも導入しようと考えていたが、設置するための基盤整備が難しかったため諦めざるを得なかった。しかし「園庭には立派に枝を張った桜の木があるんです。この枝に紐を下げてブランコにしたら気持ちいいんじゃないか……」と思った高橋園長、ホームセンターで購入した材料で、木に吊るして使うブランコを自ら製作。職員と共にテストを重ねて安全性をチェックした。ただしこのブランコは、園長がその場にいる時にしか設置せず、子どもだけでは決して使用しない、特別な「園長ブランコ」ということになった。そして今日、「園長ブランコ」を初めて園児に披露することになっているのだという。

約188㎡の広さをもつ園庭には、樹齢を重ねた桜が数本点在し、お花見スポットとしても抜群のロケーションだ。今回の助成によって整備された砂場はその入り口近くにあり、砂が山盛りになっていた。深さも十分あるそうで、たくさんの子どもたちが一度に遊んでも十分な容量。子どもたちはシャベルを上手に使って、山に穴をあけてトンネルをつくったり、いろんな形の容器で型抜きをしたり、思い思いの「創作」に励んでいる。一方、高橋園長は園庭に着くとさっそく、大きく枝をのばす桜の木に、ブランコを取り付け始めた。

子どもたちは、ブランコが設置されたのを見るや否や「園長ブランコだー!」と喜び勇んで駆け寄ってきた。「順番に並んでね。ブランコの前や後ろには行かないこと」という園長の言葉に、きちんと列をつくる。園長に手伝ってもらってブランコに座った女の子はニコニコ顔だ。「1人5回、行ったり来たりしたら次の人に交代よ」と言うと、並んでいる子どもたちは、「いーち、にー、さーん」と、大きな声で数を数え始めた。

「こういう手づくりの遊びに子どもたちは夢中になりますし、やってみたい、できた、という感覚が、子どもの心身を自然と鍛えてくれると思います」

高橋園長がそういうように、確かに、ブランコから降りた子どもの表情はど

●桜の木の枝に設置された「園長ブランコ」。
みんなきちんと列をつくり、自分の順番を待つ

こか誇らしげだ。降りる時に「自分でできる」とばかりに飛び降りようとして、ちょっと失敗してしまった男の子さえ、「面白かった！　またやってみる！」と、列の最後に並び直していた。

園庭を元気に走り回り、木に登り、泥だんごをつくる子どもたちの姿はたくましく野趣に満ちている。彼らが都会っ子であり、ここが世田谷区の住宅街であるということも忘れそうだ。みんなの力で整備した、手づくりの園庭。子どもたちはそのなかで、自分の力でやってみようというチャレンジ精神や好奇心、そして自立心を、すくすくと育んでいるようだった。

兵庫県神戸市 ABCみかげ保育園

くぐってのぼって、無限の空間で膨らむ想像力

photo:斎藤夕子

夢中になれる遊びを支援

神戸市東灘区御影地区。石材として知られる花崗岩が「御影石」と呼ばれるのは、この地に産したことに由来する。また、東灘区といえば京都・伏見と並ぶ清酒の二大産地。「この保育園も、灘の酒造組合が移転したために空いた土地にできたんです。ですから酒造りに最適な〈宮水〉を汲み上げていた井戸も残っているんですよ」と、服部愛子園長は教えてくれる。

ABCみかげ保育園は2014年4月、定員60名のところ27名の園児を迎え開園した（今年度は54名）。酒造組合があったという敷地は十分な広さで、切妻屋根の小さな家が3軒（より小さなエントランス棟を入れると4軒）連なったように見える園舎は「笑顔いっぱい　おうちのような保育園」というコンセプトにぴったりだ。園庭も260㎡の広さをもつ。しかし、その広い園庭にはこれまで、砂場のほかにとくに遊具はなかった。

●服部愛子園長（左）と主任の松原倫栄さん

「近くに公園があるので、ブランコや滑り台といった遊具はそちらで使い、園庭ではのびのび自由に遊ぶという方針だったのです。ただ、不特定多数の方々が利用する公園では、やはり、子どもたちが夢中になって遊ぶ環境を得ることは難しかった。子どもたちの興味を刺激し、想像力を広げての〈ごっこ遊び〉が展開できるような園庭の環境づくりが必要だと考え始めました。そんな時に、待機児童対策・保育所等助成事業の存在を知ったんです」（服部園長）

新たに導入する遊具として選んだのは、中が空洞になった多角面のボックスやトンネルを組み合わせた「プレイシャトー　ジャングルジム」。「複雑な形とシンプルな構造の遊具なので、子どもたちが自分の知恵で遊びをつくれるのではないかと考えて」選んだと服部園長。そして無事、助成が決まり遊具が搬入されたのが2015年12月3日。5日には保護者を招いての遊具贈呈式を開催し、園を運営する社会福祉法人千ヶ峰会の理事と共に園児代表がテープカットを行うなど、華々しい式典を執り行った。

●小さな家が連なっているように見える「ABCみかげ保育園」。手前のエントランス棟には、地域に産する御影石が用いられている

●園舎2階のランチルーム兼遊戯室。丸い照明が温かく愛らしい雰囲気をつくっている

「プレイシャトーが来てから、園児たちの遊び方はガラッと変わってきました。それまでも園庭ではお砂場遊びや縄跳び、フラフープなどをして元気に遊んでいましたが、プレイシャトーを電車やおうちに見立てたり、高いところにのぼってみたり、明らかに活動の幅が広がっています」

●2015年12月5日に開催された「遊具贈呈式」の様子(photo提供：ABCみかげ保育園)

そう教えてくれるのは、主任の松原倫栄さんだ。

驚きと発見が、子どもの意欲を育てる

園庭に出てみると、プレイシャトーではたくさんの子どもたちが遊んでいた。赤、青、黄色の、多角面ボックスやトンネル、滑り台が複雑に連結していて、中に入って移動すればまるで迷路のよう。子どもたちにしてみれば、無限の通路と出入り口があるように感じるかもしれない。実際子どもたちは飽くことなく、ボックス内を移動し、あちこちの穴から顔を出しては、常に新鮮な驚きと発見を得ているかのような、キラキラした笑顔を輝かせている。

「それぞれの年代の子どもたちが自分たちにできる遊び方に挑戦しています。この穴を抜けたらどんな風景が見えるんだろう、あそこにのぼったらどれくらい高いんだろうと好奇心をいっぱいにして、何度もボックスの中を移動しています。0歳児でも、小さい手と足に力を込めて踏ん張って、穴から身を乗り出しては違うボックスに移動していくんですよ。そんな時の誇らしげな顔ったらありません」

服部園長がそういうように、子どもたちはそれぞれ違う方法で、プレイシャトーで遊んでいる。年の大きい子どもたちは職員にアシストしてもらいながら、一番高いところから飛び降りることに挑戦していた。ボックスの一つにお友だちと籠もり、何やらおままごとのような遊びをしている女の子たちもいる。一方、ボックスの外には、水平に設置されたトンネルの上に、ギュウギュウになってまたがっている一団がいた。どうやら、今一番流行っているのはこの部分を電車やバスに見立てたごっこ遊びで、彼らにどこに行くのか聞いてみると「このバスで、東京ディズニーランドに行ってきまーす！」と元気に教えてくれた。

「プレイシャトーを導入してまだ2カ月くらいですが、子どもたちの使い方、遊び方はどんどん進化しています。当初は、子どもたちも以前からよく知っている滑り台が人気でしたが、ボックスの中に入ってみたら、その空間が不思議で、面白いことに気づいたのでしょう。新しい方法を次々と考え出して遊びを〈創造〉しています。また、トンネルをくぐり抜けると、思いがけずお友だちと鉢合わせすることもある。それは楽しい驚きです。ただ同時に、移動するためには進路を譲り合わなければいけないこともある。そんなところから社会性も育まれているように感じます。私たち職員は、そんな子どもたちの成長をきちんと見守って、これからも、支援していきたいと思っています」（服部園長）

先にも触れたように、保育園のある東灘区は昔から酒造業が盛んで、地域住民も代々同じ土地に暮らしている人が多い。何より、毎年5月に開催される「灘のだんじり祭り」を中心に、コミュニティの結束が強いのだそうだ。ちなみに勇壮なだんじりは、園舎の前も巡行し、その時には子どもたちも手を振ってこれを見送るのだという。

ABCみかげ保育園には、そんな地域の人々にも温かく受け入れられ、伸びやかに想像の翼を広げる子どもたちの元気な笑顔が満ちていた。

●プレイシャトージャングルジムで、元気に遊ぶ子どもたち。ボックスの中に入ったり、上に乗ったり。子どもたちは毎日のように新たな遊びをつくり出し、楽しんでいる。トンネルの上にまたがるのは、「このバスで東京ディズニーランドに向かう」という一行だ

back number

今号と関連する特集号をPick Up
（その他は特集タイトルのみ）

No.1 特集「都市の幹線道路」（1984.2）**在庫切れ**

No.2 特集「都市公園」（1984.5）**在庫切れ**

No.3 特集「都市と河川」（1984.12）

No.4 特集「子どものための都市計画」（1985.6）**在庫切れ**

No.5 特集「都市と盛り場」（1985.12）

No.6 特集「都市生活と神社仏閣」（1986.5）

No.7 特集「住宅地の道路と家並み」（1986.9）

No.8 特集「都市とヒューマンスケール」（1987.3）

No.9 特集「都市と水辺」（1987.7）**在庫切れ**

No.10 特集「都市の景観」（1987.12）**在庫切れ**

No.11 特集「都市と防火」（1988.7）**在庫切れ**

No.12 特集「都市とアメニティ」（1988.12）**在庫切れ**

No.13 特集「都市と運河」（1989.8）

No.14 特集「都市再開発とアーバンデザイン」（1989.12）

No.15 特集「アミューズメントと都市」（1990.3）

No.16 特集「高齢化社会と都市」（1990.6）**在庫切れ**

No.17 特集「私鉄と歩んだ都市」（1990.9）

No.18 特集「都市とホール」（1990.12）

No.19 特集「エコロジー都市」（1991.3）

- 都市のエコロジー｜半谷高久
- 対談｜都市のアメニティ―地球環境問題から考える｜木原啓吉＋秋山紀子
- ルポ｜エコポリスの条件
- インタビュー｜都市に土の論理を!｜明峰哲夫
- 持続可能な都市―コモンズから考える｜多辺田政弘
- 環境アセスメント―開発と自然保護の間で｜島津康男
- 対談｜環境論理の逆説｜川本隆史＋大澤真幸
- 連載｜都市を拓いた人々･2 北九州｜吉田豊

No.20 特集「新･集合住宅論」（1991.6）

No.21 特集「新･リゾート論」（1991.9）

No.22 特集「都市と商業空間」（1991.12）

No.23 特集「都市の民俗誌」（1992.3）

No.24 特集「都市と緑化」（1992.6）

No.25 特集「公共建築のデザイン」（1992.9）

No.26 特集「都市と高層ビル」（1992.12）

No.27 特集「住宅の間取り」（1993.3）

No.28 特集「都市と広告」（1993.6）

No.29 特集「都市の上水道」（1993.9）

No.30 特集「都市の保存」（1993.12）

No.31 特集「ミュージアムと都市」（1994.3）

No.32 特集「プレハブ住宅」（1994.6）

No.33 特集「都市の色彩」（1994.9）

No.34 特集「観光都市の条件」（1994.12）

No.35 特集「都市と下水道」（1995.3）

No.36 特集「マンションのメンテナンス」（1995.6）

No.37 特集「都市と歩道空間」（1995.9）

No.38 特集「ゴミとリサイクル」（1995.12）

No.39 特集「住宅の水まわり」（1996.3）

No.40 特集「都市の駐車空間」（1996.6）

No.41 特集「橋のデザイン」（1996.9）

No.42 特集「建築と木材」（1996.12）

No.43 特集「輸入住宅」（1997.3）

No.44 特集「都市と学校」（1997.6）

No.45 特集「環境共生型まちづくり」（1997.9）

- インタビュー｜ゼロエミッションからのまちづくり｜グンター･パウリ
- 地域･生活･産業のエコロジカルな再生―ドイツ･IBAエムシャーパーク･プロジェクトの挑戦
- ルポ｜エコロジカル･ハウジングの実験―環境共生住宅地を訪ねて｜世田谷区深沢環境共生住宅／NEXT21／マテール穴生／山口朝田ヒルズ
- インタビュー構成｜都市にビオトープを｜杉山恵一
- インタビュー｜共生のための技術を求めて―環境エンジニアリングの未来
- 連載｜戦後都市論の系譜学･5｜なつめひろみ

No.46 特集「都市と情報化」（1997.12）

No.47 特集「老いない住宅」（1998.3）

No.48 特集「都市と駅舎」（1998.6）

No.49 特集「住宅のコスト」（1998.9）

No.50 特集「路面電車ルネサンス」（1998.12）

No.51 特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう―集客都市へ」（1999.3）

No.52 特集「シルバー･ハウジング」（1999.6）

No.53 特集「NPOとまちづくり」（1999.9）

No.54 特集「地域のノード、公共施設の新潮流」（1999.12）

No.55 特集「都市公園の未来」（2000.3）

- 「都市公園」から「公園都市」へ｜進士五十八
- インタビュー｜都市の中のエコロジカルなネットワーク―都市公園に求められるもの
- コラム｜「公園」におけるアートの可能性―札幌芸術の森
- ルポ｜インダストリアル･ネイチャー―三つのエコロジーが出会う場所
- ケーススタディ｜都市を“自然”へひらく―エムシャーパーク、持続可能なまちづくり
- ケーススタディ｜エコロジーパーク―都市公園の新しい姿
- 連載｜高齢社会のまちづくり･4
- 連載｜都市を拓いた人々･33 横浜

No.56 特集「まちづくりの新しいパラダイム」（2000.6）

- 対談｜21世紀「まちづくり」の条件｜日端康雄＋林泰義
- 対談｜ソフトインフラをつくる―多様性としてのまちづくり｜延藤安弘＋折戸雄司
- クロニクル･アーカイブス｜都市開発･まちづくりの50年―戦後「都市」はどう変わったか
- 対談｜バーチャルシティのデザイン―伽藍型まづくりからバザール型まちづくりへ｜山形浩生＋五十嵐太郎
- 連載｜高齢化社会のまちづくり･5
- 連載｜都市を拓いた人々･34 四日市

No.57 特集「島のまちづくりに学ぶ｜沖縄編」（2000.9）

No.58 特集「地域に開く大学」（2000.12）

No.59 特集「危機管理のまちづくり」（2001.3）

No.60 特集「保存―都市と建築、過去と未来をつなぐもの」（2001.6）

No.61 特集「30代建築家の都市イメージ」（2001.9）

No.62 特集「使う建築、使うまち―都市のストック活用法｜国内編」（2001.12）

No.63 特集「LETS的まちづくり」（2002.3）

No.64 特集「『都心居住』のまちづくり」（2002.6）

No.65 特集「都市はアートで刺激される」（2002.9）

No.66 特集「ランドスケープ･デザインの新展開―地形を活かしたまちづくり」（2002.12）

No.67 特集「スローライフとまちづくり」（2003.3）

No.68 特集「サステナブルな都市“成長”政策―都市計画と長期ビジョン」（2003.6）

No.69 特集「吉祥寺―住みたい町ナンバー1の理由」（2003.9）

No.70 特集「緑の建物づくり」（2003.12）

No.71 特集「都市と観光、新たな視点」（2004.3）

No.72 特集「構造改革特区とまちづくり」（2004.6）

No.73 特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」（2004.9）

No.74 特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市［論］の現在」（2004.12）

No.75 特集「マルチモーダルが都市を楽しくする［ヨーロッパ編］」（2005.3）

No.76 特集「路地･横丁空間からの都市再生」（2005.6）

No.77 特集「公共空間、新たな視点」（2005.9）

No.78 特集「小さな町の豊かな暮らし」（2005.12）

No.79 特集「都市の「良質な」居住環境」（2006.3）

No.80 特集「エリア･スタディ･シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❶」（2006.6）

No.81 特集「「安全･安心のまちづくり」を考える」（2006.9）

No.82 特集「エリア･スタディ･シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」（2006.12）

No.83 特集「ジェイン･ジェイコブスの宿題」（2007.3）**重版**

No.84 特集「サイクリング･シティの可能性」（2007.6）

No.85 特集「地図とまち―見る･歩く･つくる」（2007.9）

No.86 特集「エリア･スタディ･シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❷」（2007.12）

No.87 特集「「美味し国」の景観論―フランス、都市景観の新たな創造」（2008.3）

No.88 特集「美味しいまちづくり」（2008.6）

- 鼎談｜ガストロノミーが町を魅力的にする｜松永安光＋陣内秀信＋島村菜津
- ケーススタディ｜「食」が主役の元気な町｜静岡県富士宮市―「ヤキソバの町」から「食の町」へ。市民発の活動が、町を動かす／青森県八戸市―「B級ご当地グルメ」でまちづくり／岩手県一関市―建物を活かし地産を活かす「食」のまちづくり／愛媛県今治市―畑から食卓へ。顔の見える関係が育む、美味しい「食育先進都市」
- アルバム｜「美味しい町」の風景

No.89 特集「都市を愉しむいくつかの方法」（2008.9）

No.90 特集「シュリンキング･シティ―縮小する都市の新たなイメージ」（2008.12）

No.91 特集「都市彩譜―まちのいろどりのふ」（2009.3）

No.92 特集「fun town―たのしい･かわいい･やさしいまちづくり」（2009.6）

No.93 特集「マチとムラの幸福のレシピ」（2009.9）

- インタビュー｜なりわい興しで、新しい〈マチ〉と〈ムラ〉の関係をつくろう｜佐藤誠
- ルポ｜「日本で最も美しい村」―地域に生きる幸せを求めて｜遠藤哲夫
- ルポ｜「美の条例」が守り育む、「暮らし」の景観―神奈川県真鶴町の試み
- イタリアのスローシティ―美しい村の暮らし｜島村菜津
- 「農山村」と「都市」の関係を考える｜橋口卓也

No.94 特集「創造のまちづくり」（2009.12）

No.95 特集「団地ルネッサンス」（2010.3）

No.96 特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」（2010.6）

No.97 特集「新しい公共交通～生活支援ネットワークへ～」（2010.9）

No.98 特集「下北沢から「都市」を考える」（2010.12）**在庫切れ**

No.99 特集「「学校」からのまちづくり」（2011.3）

No.100 特集「21世紀のまちづくり 「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」」（2011.6）

No.101 特集「震災後の地域･コミュニティ･住まい―再生･復興への視点」（2011.9）

No.102 特集「交流住宅―新しい暮らしのかたち」（2011.12）

No.103 特集「時間に暮らす」（2012.3）

No.104 特集「エリア･スタディ･シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」（2012.6）

No.105 特集「「町おこし」新潮流― 地域に埋もれたコンテンツを発信する」（2012.9）

No.106 特集「子どもの空間とまちづくり」（2012.12）**在庫切れ**

No.107 特集「シティホール―市庁舎の新潮流」（2013.3）

No.108 特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」（2013.7）

No.109 特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」（2013.11）

No.110 特集「都市とサイン」（2014.3）

No.111 特集「自由が丘―暮らしやすさの秘密を探る」（2014.7）

No.112 特集「新しいパートナーシップ―PPP＞PFI＞コンセッション方式」（2014.11）

No.113 特集「新しい図書館」（2015.3）

No.114 特集「空き家―家と暮らしと地域のこれから」（2015.7）

No.115 特集「酒とまちづくり」（2015.11）

- エリアスタディ｜酒と地域のライフデザイン｜山梨･甲州―ワインにまつわる遺産や風景を楽しみ、歩き、飲むのが勝沼流／京都･伏見―京都で生まれ育った酒米を、京都の水と技術で醸す／東京･阿佐ヶ谷―地域の「飲み屋文化」を活かした「阿佐ヶ谷飲み屋さん祭り」
- ルポ･1｜地ビールづくりはまちづくり
- ルポ･2｜京都発、全国に広がる「乾杯条例」
- エッセイ｜酒好きと酒と酒蔵と「町」または「ふるさと」｜遠藤哲夫
- スキマファイル･6｜ドンツキラビリンス、向島･京島を行く
- 子どもたちの「笑顔」に会いに行く･6｜城山保育園上石原「〈いのち〉を見つめる〈城山ミュージアム〉」／天王寺駅前おおぞら保育園「屋上の〈ちいさなみんなの森〉で四季を味わう」

平成27年度研究助成公募課題決定

今年度実施の第25回研究助成には56件（一般研究37件、奨励研究19件）の応募がありました。
1月に開催した審査委員会で8件（一般研究4件、奨励研究4件）を選定し、3月の理事会において決定いたしました。
助成対象となった研究課題は次のとおりです。

平成27年度研究助成対象課題（応募受付順・敬称略）

	研究課題名	助成金額
一般研究	フランスに於けるスマート・スプロールの計画技術に関する基礎的研究－持続可能な郊外開発を探求するために－　鳥海基樹（首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 准教授）	150万円
	食べられる景観（エディブル・ランドスケープ）を活用したプレイスメイキングによる予防的セーフティネットの構築　木下 勇（千葉大学大学院園芸学研究科 教授）他	135万円
	容積率ボーナス型都市開発制度の新たな展開可能性－東京都とニューヨーク市の比較研究　有田 智一（筑波大学システム情報系社会工学域 教授）他	150万円
	復興まちづくりにおける地域型住宅による自立再建住宅支援に関する研究　後藤 治（工学院大学建築学部建築デザイン学科 教授）他	135万円
奨励研究	都市への他出家族が過疎農山村の高齢者の生活と農地・山林管理に果たす役割の社会学的研究　丸山 真央（滋賀県立大学人間文化学部 准教授）他	80万円
	過疎地域の空き家再生のきっかけづくりの研究　坂東 幸輔（京都市立芸術大学美術学部デザイン科環境デザイン専攻 講師）	80万円
	低未利用地を抱える衰退地区の持続的再生を目指す米国のPlace-based支援の効果と課題　黒瀬 武史（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 助教）	75万円
	世代間不均衡下の都市倫理　吉良 貴之（宇都宮共和大学シティライフ学部 専任講師）他	60万円

information

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、平成25年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業に取り組んでいます。

●ホームページ　http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/

city&life no.116 Mar-Jun 2016
2016年3月発行

企画委員　日端康雄（慶應義塾大学名誉教授）
陣内秀信（法政大学教授）
林 泰義（特定非営利活動法人玉川まちづくりハウス運営委員）
大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
小泉秀樹（東京大学教授）
森田弘志（当財団専務理事）
佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）

編集・発行　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社アルシーヴ社
斎藤夕子

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社恒陽社印刷所
頒価500円・送料215円

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life no.116 Mar-Jun 2016